三重県埋蔵文化財調査報告１３９

堀田遺跡第3次発掘調査概報

１９９６・３

三重県埋蔵文化財センター

序

嬉野町は、伊勢平野の中央部に位置しており、古くから文化が開けた場所です。とくに雲出川右岸では、三重県を代表する古墳が随所に築造されてきました。また飛鳥・奈良時代に入ると、都から伊勢への官道もこの地を通っていたとされ、斎王群行をはじめ、東国への交通の要地として栄えた場所でもあります。また、この時代の遺跡から出土した遺物には畿内の土器と共通する特徴をもつものが多く、県内でも注目されています。

さて、今回報告する堀田遺跡は、主要地方道松阪一志線国補道路特殊改良第一種工事に伴って調査されたものです。当遺跡では、第３次の調査となります。調査の結果、古墳時代から奈良時代の遺構が確認され、流路からは埴輪、須恵器、土馬、土師器や多量の木製品が出土しました。これらは、この地域の歴史を考える上で貴重な資料となります。

このような文化財は、私たちの祖先の歴史を物語る重要な資料として後世に残していかなくてはならないものです。さらに、これらを広く公開していかなくてはならないと考えております。

発掘調査にあたり、ご協力いただいた関係機関および地元の皆様に厚くお礼申し上げますとともに、地域の文化財保護に更なるご理解とご協力をいただきますようお願いいたします。

平成８年３月

三重県埋蔵文化財センター

所　長　　川　村　政　敬

例　言

1　本書は、三重県一志郡嬉野町宮古字堀田に所在する堀田遺跡（第３次）の発掘調査結果の概要をまとめたものである。

2　今回の調査は、平成７年度主要地方道松阪一志線国補道路特殊改良（第一種）工事に伴い、滅失する部分について事前に発掘調査を行ったもので、当遺跡の調査としては、昭和５３年及び昭和５６年の県営ほ場整備事業に伴う調査に続く、第３次調査となる。

3　調査の体制は以下のとおりである。

調　査　主　体　　三重県教育委員会

調　査　担　当　　三重県埋蔵文化財センター

主事　中川　明　　技師　西村美幸　　技術補助員　山田康博

調　査　期　間　　平成７年10月２日～平成８年２月９日

4　調査にあたっては、三重県土木部道路建設課、久居土木事務所、嬉野町教育委員会、同町建設課及び地元の方々に協力を頂くとともに、青木哲哉氏（立命館大学）、金原正明氏（天理大学）には調査時に現地でご指導をいただいた。記して謝意を表します。

5　本書の執筆編集は中川　明、西村美幸が行い、文責は各文末に記した。

6　本書で示す方位はすべて真北を用いた。なお、磁北は６°20′西偏（平成元年１月）している。

7　本文で用いた遺構表示略記号は、下記の通りである。

ＳＤ：自然流路、溝　　ＳＫ：土坑　　ＳＲ：道路

Pit　：柱穴、小穴

8　本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

9　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ．前言 …… 1
Ⅱ．位置と歴史的環境 …… 1
Ⅲ．遺構と層序 …… 2
Ⅳ．遺物 …… 9
Ⅴ．結語 …… 12

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　遺跡地形図 …… 3
第３図　調査区位置図 …… 3
第４図　上層遺構平面図 …… 4
第５図　下層遺構平面図 …… 4
第６図　東壁土層断面図 …… 5
第７図　上層ＳＤ８土層断面図 …… 6
第８図　上層ＳＫ18遺物出土状況図 …… 6
第９図　上層ＳＫ20遺物出土状況図 …… 6
第10図　下層ＳＤ４土層断面図 …… 6
第11図　下層ＳＤ２・ＳＤ４、井堰１・２平面図 …… 7
第12図　井堰１平面図、断面図 …… 7
第13図　杭列平面図、断面図 …… 8
第14図　下層ＳＤ４内土師器出土状況図 …… 8
第15図　下層ＳＤ４内木製品出土状況図 …… 8
第16図　出土遺物実測図（１） …… 14
第17図　出土遺物実測図（２） …… 15
第18図　出土遺物実測図（３） …… 16
第19図　出土遺物実測図（４） …… 17
第20図　出土遺物実測図（５） …… 18
第21図　出土遺物実測図（６） …… 19
第22図　出土遺物実測図（７） …… 20

表　目　次

第１表　遺物観察表 …… 13

図　版　目　次

ＰＬ　１　上層南半（北から）
　　北半（南から）
ＰＬ　２　下層旧流路（北から）
　　井堰１　（西から）
ＰＬ　３　出土遺物
　　ＳＤ４出土のＳ字甕
　　ＳＤ４出土の扉材
ＰＬ　４　ＳＤ４出土の槽
　　ＳＤ４出土の枠材
　　５　出土遺物
　　６　出土木製品

Ⅰ．前　言

堀田遺跡は、三重県一志郡嬉野町に所在する周知の遺跡で、遺跡番号は嬉野町224である。当遺跡は、昭和53年及び56年に県営ほ場整備事業に伴う発掘調査が行われ、飛鳥～平安時代の遺構や遺物が確認されている。

主要地方道松阪一志線の改良工事に伴い、平成６年度に試掘調査を行ったところ、古墳～奈良時代の遺構・遺物を確認した。

そこで、県土木部道路建設課と遺跡保存について協議を重ねた結果、保存不可能な部分についての発掘調査を行うこととなった。この内、本年度は、現道東側の1,500㎡について発掘調査を実施することになった。

Ⅱ．位置と歴史的環境

堀田遺跡（１）は、伊勢平野の中央部を東流して伊勢湾に注ぐ雲出川と嬉野町を縦貫する中村川の合流点の約1.5㎞上流、中村川左岸の低位段丘上に位置する。標高は約10ｍで、背後には天花寺丘陵がある。昭和53年、56年度の調査では、竪穴住居、土坑、溝などの遺構と、飛鳥～奈良時代の土師器、須恵器、瓦、円面硯等の遺物が確認されている。[①]

当遺跡の所在する地域は古くから歴史の開けた場所で、古墳時代前期になると筒野１号墳（２）が所在し、向山古墳（３）、西山１号墳（４）、錆山古墳（５）といった前方後方墳が集中して築かれる。当遺跡の南西に広がる天花寺丘陵には、この内全長45ｍの筒野１号墳が所在し、他にも高取塚（６）・郡塚（７）・西野３号墳（８）などの前期古墳の存在が知られている。[②]

後期になると中村川と雲出川の間の丘陵上に総数

第１図　遺跡位置図（１：50,000）（国土地理院「大仰」１：25,000から）

300基以上もの古墳が築かれるようになる。天花寺丘陵でも小谷古墳群（９）や赤坂古墳群（10）など多数の古墳の分布がみられる。西野５号墳[3]（11）や天保１号墳[4]（12）はこの地域でも早い時期に横穴式石室を採用した古墳である。共に金銅製の馬具などが出土している。

古墳時代の集落では、初頭から後期にわたって集落が形成された下之庄東方遺跡[5]（13）や、後期の竪穴住居が多数確認されている片野遺跡[6]（14）がある。また、西山古墳の西側に位置する片部遺跡（15）では、古墳時代前期の大規模な流水路および堰が確認され、最古の墨書土器の可能性が指摘されている土師器小形丸底壷が出土している[7]。

飛鳥～奈良時代のかけてのこの地域は、県内でも有数の古代寺院の集中地域となり、天花寺廃寺[8]（16）、一志廃寺[9]（17）、上野廃寺[10]（18）、嬉野廃寺（19）、八太廃寺[11]（20）、高寺廃寺などの寺院が建立される。集落では平生遺跡[12]（21）　焼野遺跡[13]（22）、片野遺跡[14]、下之庄東方遺跡[15]が等あり、竪穴住居や掘立柱建物が多数みつかっている。

この時代の一志郡内の遺跡からは精緻な暗文が施された土師器が多数出土し、畿内との関連が注目されている。

一志郡家の所在地としては、当遺跡近くの嬉野町宮古あるいは一志が、斎王群行の一志頓宮の所在地として一志が想定されている。また都と伊勢神宮を結ぶ古代の官道も当遺跡の東方を通っていたと考えられる。　（西村美幸）

〔註〕

①「堀田遺跡」（『三重県埋蔵文化財年報９』三重県教育委員会、1979年
早川裕巳「堀田遺跡」（『昭和56年度県営ほ場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会、1982年）

②この地域の前期古墳については、伊勢野久好他『天花寺山』（一志町・嬉野町遺跡調査会、1991年）に詳しい。

③伊勢野久好他『天花寺山』（一志町・嬉野町遺跡調査会、1991年）

④前川嘉宏「天保古墳群」（『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告－第３分冊３－』三重県埋蔵文化財センター、1991年）

⑤吉水康夫他「下之庄東方遺跡（高畑地区）」（『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』三重県教育委員会、1987年）
吉水康夫他「下之庄東方遺跡（小野・四反畑・夜ノ堀地区）」（『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』三重県教育委員会、1988年）

⑥伊藤正文『片野遺跡発掘調査報告』（一志町教育委員会、1985年）
伊勢野久好『片野遺跡第三次発掘調査報告』（一志町教育委員会、1986年）

⑦和気清章他『片部遺跡発掘調査現地説明会資料』（嬉野町教育委員会、1987年）

⑧山田猛「天花寺廃寺」（『昭和54年度県営ほ場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会、1980年）

⑨「一志廃寺」（『三重県埋蔵文化財センター年報４』三重県埋蔵文化財センター、1993年）

⑩和気清章他『嬉野廃寺発掘調査報告』（嬉野町教育委員会、1995年）

⑪「八太廃寺」（『三重県埋蔵文化財センター年報１～２』三重県埋蔵文化財センター、1990・1991年）

⑫吉村利男他『平生遺跡発掘調査報告』（平生遺跡発掘調査団、1976年）
福田哲也他『平生遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1994年）

⑬新田洋「焼野遺跡」（『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告－第３分冊４－』、三重県埋蔵文化財センター、1991年）

⑭註⑦の文献と参照。

⑮註⑥の文献と参照。

⑯足利健亮『日本古代地理研究』（大明堂、1985年）

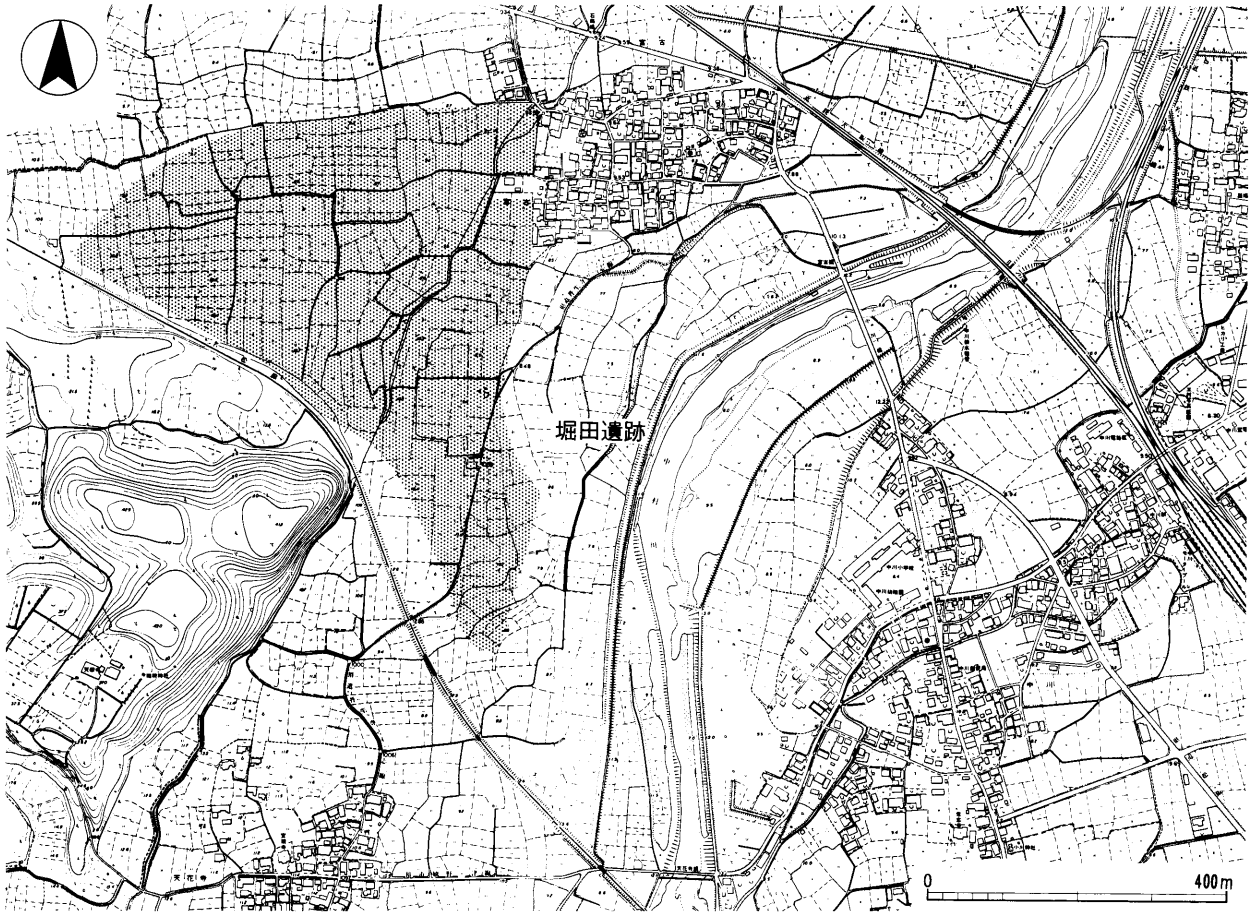
Ⅲ．遺構と層序

１．基本層序

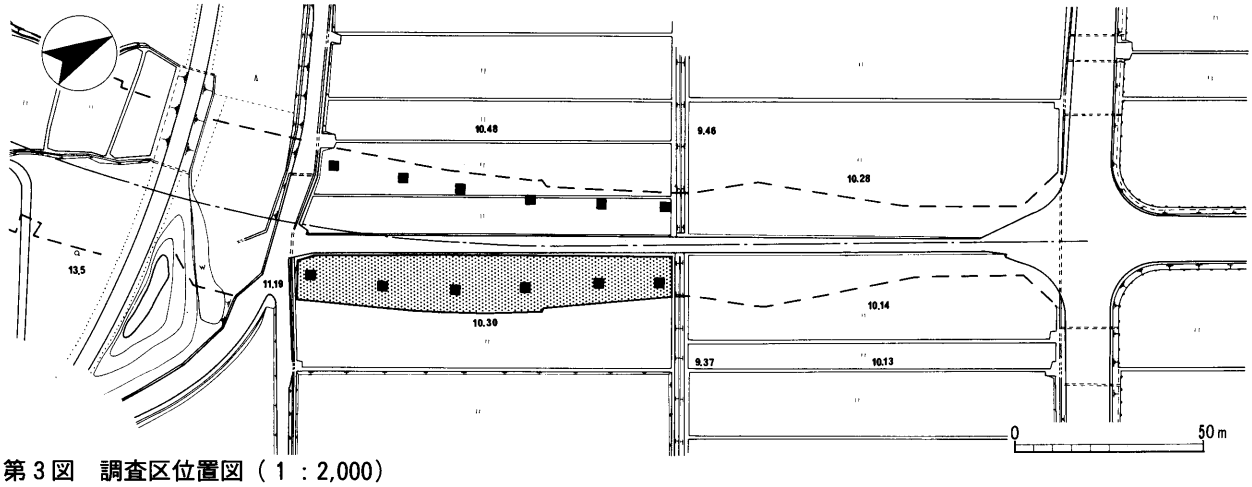
今回の調査区は、昭和56年度にほ場整備の終了した水田で、現地表面の標高は、約10mで、緩やかに北に傾斜している。

調査区の基本的な層序は、第１層は明灰色土（耕作土）、第２層は黄褐色土（床土）、第３層は粗砂が混入する淡灰色砂質土（遺物包含層）となっている。第４層は灰褐色シルトで調査区南部では、上面に鉄分の沈着が見られる。第５層は青灰色シルト、第６層は有機層と砂の互層（南半のみ）、第７層は暗灰色粘土、第８層は青灰色粘土、第９層は灰褐色砂質土となっている。

第４層の上面で上層遺構を検出し、第５層の上面で下層遺構を検出した。基本的な層序は以上だが、なお第５層以下は低湿地における比較的緩慢な堆積層と考えられ、今回の調査区では安定した基盤は見



第２図　遺跡地形図（１：10,000）



第３図　調査区位置図（１：2,000）

られなかった。

２．遺構概要

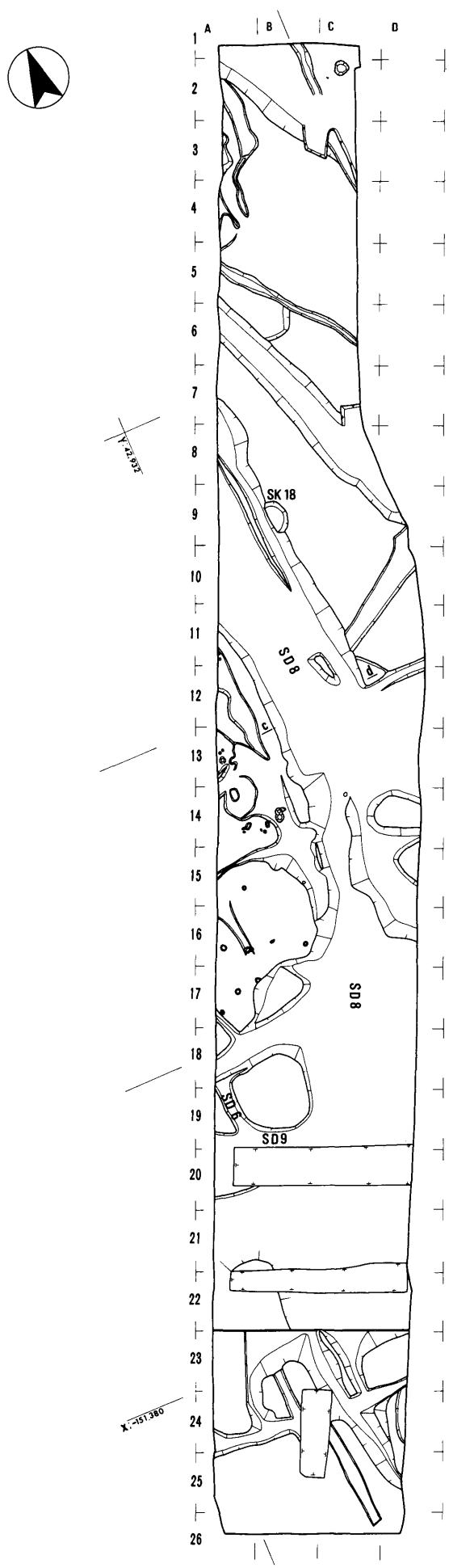
今回の調査は、飛鳥～奈良時代の遺構面（上層）と、弥生中期～古墳時代の遺構面（下層）に分けて実施した。以下それぞれの概要を説明する。

（１）上層遺構

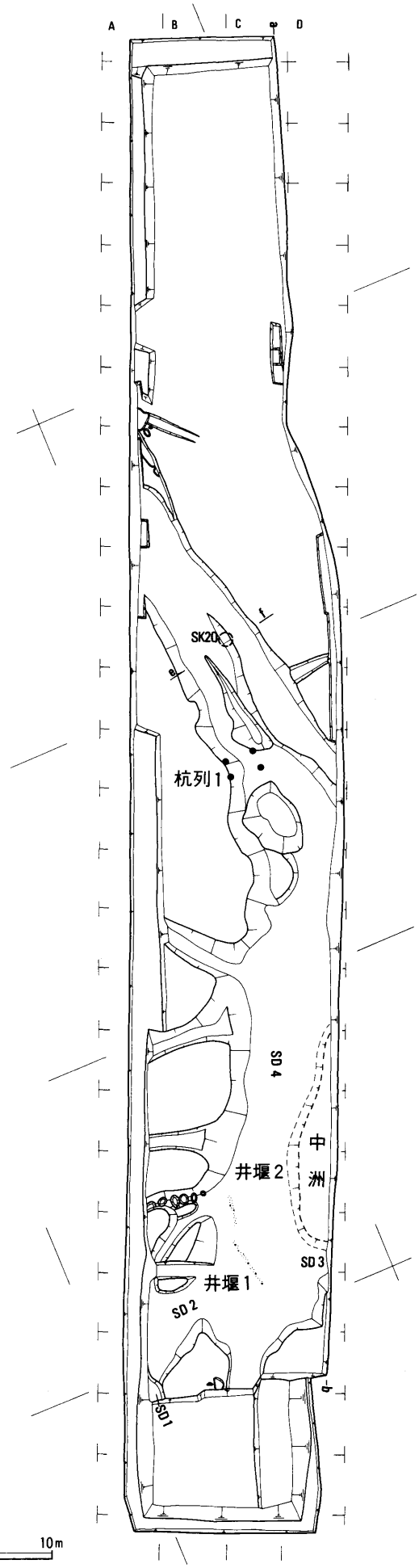
前述のとおり、検出面は第４層褐色系シルトの上面で、調査区中央は茶褐色、南半は灰褐色を呈している。また、北半は第４層のシルトが顕著でなくなり、代わって堆積している黄色砂を検出面とした。飛鳥～奈良時代の流路多数と土坑、Pit 等を確認している。以下、主要な遺構について概述する。

Ａ．流路

ＳＤ８　南北方向の流路である。13グリッド以北では幅約10m、深さ約0.5ｍの広く浅い溝状を呈するが、同グリッド以南では、幅がさらに広がり、浅い

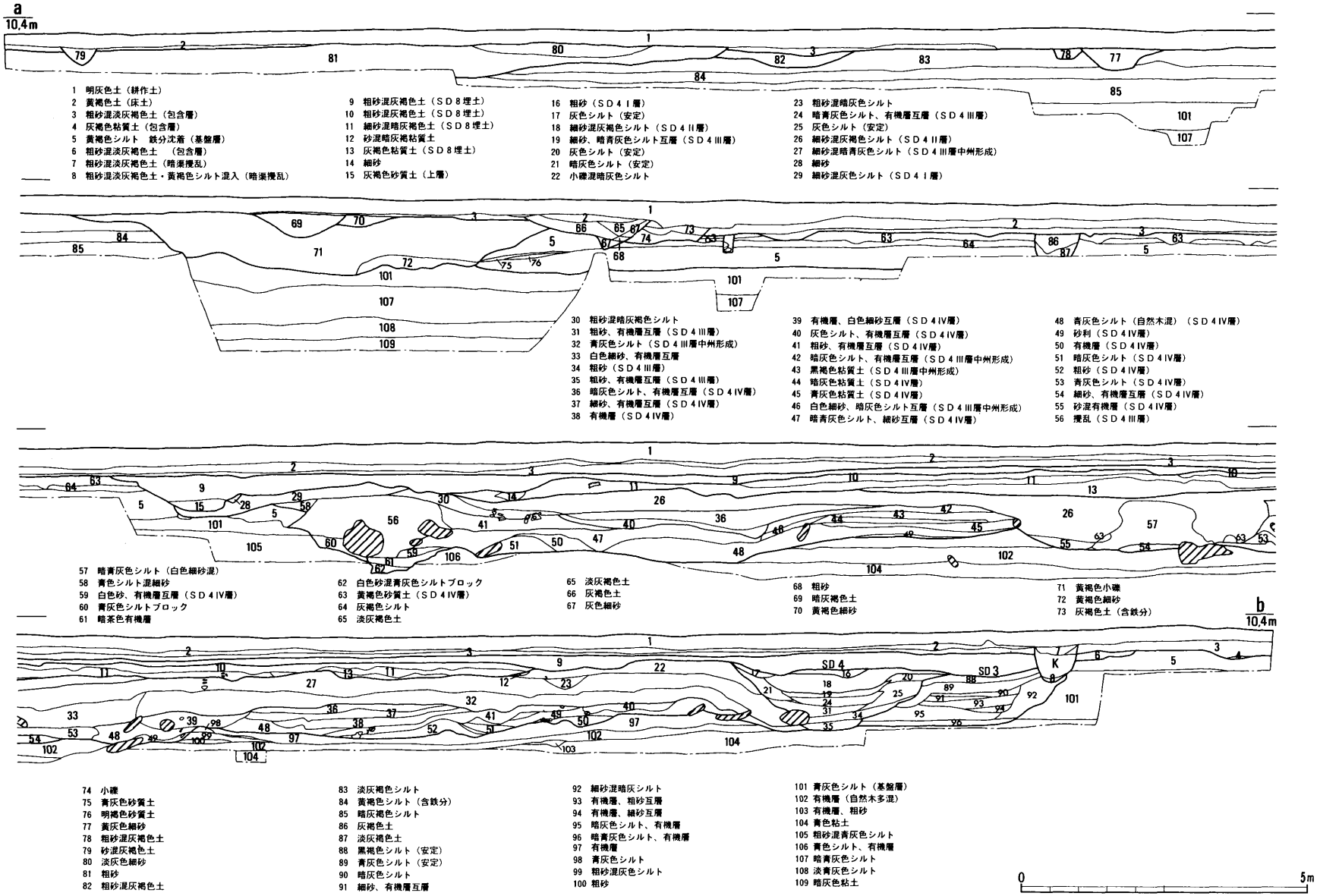


第4図　上層遺構平面図（1：400）



第5図　下層遺構平面図（1：400）

第６図　東壁土層断面図（１：５０）



1 明灰色土（耕作土）
2 黄褐色土（床土）
3 粗砂混淡灰褐色土（包含層）
4 灰褐色粘質土（包含層）
5 黄褐色シルト　鉄分沈着（基盤層）
6 粗砂混淡灰褐色土　（包含層）
7 粗砂混淡灰褐色土（暗渠撹乱）
8 粗砂混淡灰褐色土・黄褐色シルト混入（暗渠撹乱）
9 粗砂混灰褐色土（ＳＤ８埋土）
10 粗砂混灰褐色土（ＳＤ８埋土）
11 細砂混暗灰褐色土（ＳＤ８埋土）
12 砂混暗灰褐粘質土
13 灰褐色粘質土（ＳＤ８埋土）
14 細砂
15 灰褐色砂質土（上層）
16 粗砂（ＳＤ４Ⅰ層）
17 灰色シルト（安定）
18 細砂混灰褐色シルト（ＳＤ４Ⅱ層）
19 細砂、暗青灰色シルト互層（ＳＤ４Ⅲ層）
20 灰色シルト（安定）
21 暗灰色シルト（安定）
22 小礫混暗灰色シルト
23 粗砂混暗灰色シルト
24 暗青灰色シルト、有機層互層（ＳＤ４Ⅲ層）
25 灰色シルト（安定）
26 細砂混灰褐色シルト（ＳＤ４Ⅱ層）
27 細砂混暗青灰色シルト（ＳＤ４Ⅲ層中州形成）
28 細砂
29 細砂混灰色シルト（ＳＤ４Ⅰ層）
30 粗砂混暗灰褐色シルト
31 粗砂、有機層互層（ＳＤ４Ⅲ層）
32 青灰色シルト（ＳＤ４Ⅲ層中州形成）
33 白色細砂、有機層互層
34 粗砂（ＳＤ４Ⅲ層）
35 粗砂、有機層互層（ＳＤ４Ⅲ層）
36 暗灰色シルト、有機層互層（ＳＤ４Ⅳ層）
37 細砂、有機層互層（ＳＤ４Ⅳ層）
38 有機層（ＳＤ４Ⅳ層）
39 有機層、白色細砂互層（ＳＤ４Ⅳ層）
40 灰色シルト、有機層互層（ＳＤ４Ⅳ層）
41 粗砂、有機層互層（ＳＤ４Ⅳ層）
42 暗灰色シルト、有機層互層（ＳＤ４Ⅲ層中州形成）
43 黒褐色粘質土（ＳＤ４Ⅲ層中州形成）
44 暗灰色粘質土（ＳＤ４Ⅳ層）
45 青灰色粘質土（ＳＤ４Ⅳ層）
46 白色細砂、暗灰色シルト互層（ＳＤ４Ⅲ層中州形成）
47 暗青灰色シルト、細砂互層（ＳＤ４Ⅳ層）
48 青灰色シルト（自然木混）（ＳＤ４Ⅳ層）
49 砂利（ＳＤ４Ⅳ層）
50 有機層（ＳＤ４Ⅳ層）
51 暗灰色シルト（ＳＤ４Ⅳ層）
52 粗砂（ＳＤ４Ⅳ層）
53 青灰色シルト（ＳＤ４Ⅳ層）
54 細砂、有機層互層（ＳＤ４Ⅳ層）
55 砂混有機層（ＳＤ４Ⅳ層）
56 撹乱（ＳＤ４Ⅲ層）
57 暗青灰色シルト（白色細砂混）
58 青色シルト混細砂
59 白色砂、有機層互層（ＳＤ４Ⅳ層）
60 青灰色シルトブロック
61 暗茶色有機層
62 白色砂混青灰色シルトブロック
63 黄褐色砂質土（ＳＤ４Ⅳ層）
64 灰褐色シルト
65 淡灰褐色土
65 淡灰褐色土
66 灰褐色土
67 灰色細砂
68 粗砂
69 暗灰褐色土
70 黄褐色細砂
71 黄褐色小礫
72 黄褐色細砂
73 灰褐色土（含鉄分）
74 小礫
75 青灰色砂質土
76 明褐色砂質土
77 黄灰色細砂
78 粗砂混灰褐色土
79 砂混灰褐色土
80 淡灰色細砂
81 粗砂
82 粗砂混灰褐色土
83 淡灰褐色シルト
84 黄褐色シルト（含鉄分）
85 暗灰褐色シルト
86 灰褐色土
87 淡灰褐色土
88 黒褐色シルト（安定）
89 青灰色シルト（安定）
90 暗灰色シルト
91 細砂、有機層互層
92 細砂混暗灰シルト
93 有機層、粗砂互層
94 有機層、細砂互層
95 暗灰色シルト、有機層
96 暗青灰色シルト、有機層
97 有機層
98 青灰色シルト
99 粗砂混灰色シルト
100 粗砂
101 青灰色シルト（基盤層）
102 有機層（自然木多混）
103 有機層、粗砂
104 青色粘土
105 粗砂混青灰色シルト
106 青色シルト、有機層
107 暗青灰色シルト
108 淡青灰色シルト
109 暗灰色粘土

落ち込み状を呈している。

埋土は茶褐色砂質土で、飛鳥後期～奈良時代前半の土師器杯・皿・高杯・壷・甕、須恵器杯蓋、壷・甕、土馬などが数多く出土している。

ＳＤ９　Ａ・Ｂ19グリッド付近で検出した。幅0.6～1.8ｍで、深さ約0.2ｍの流路である。東流してＳＤ８に流入する。ＳＤ６との合流地点から、奈良時代中期の須恵器壷が出土している。

Ｂ．土坑

ＳＫ18　Ｂ９グリッドで検出した。東西1.4ｍ、南北2.4ｍ、深さ0.35ｍの楕円形の土坑である。埋土は茶褐色砂質土でＳＤ８を切る。ＳＤ８と同時期の土師器杯・甕が出土している。

ＳＫ20　Ｃ11グリッドで検出した。東西0.8ｍ、南北0.6ｍ、深さ0.4ｍのほぼ円形の土坑である。ＳＤ８掘削完了時に底面で確認した。埋土はＳＤ８と同じ暗茶褐色土で、ＳＤ８と同時期の土師器杯が出土している。

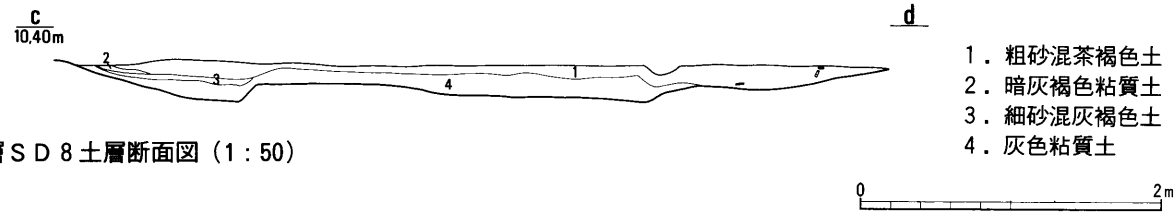
（２）下層遺構

弥生時代中期～古墳時代にかけての流路、および遺構を確認している。

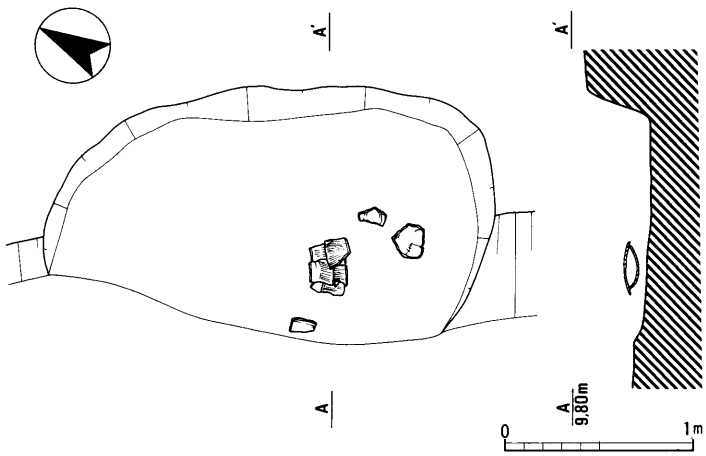
１．弥生時代の遺構

流路

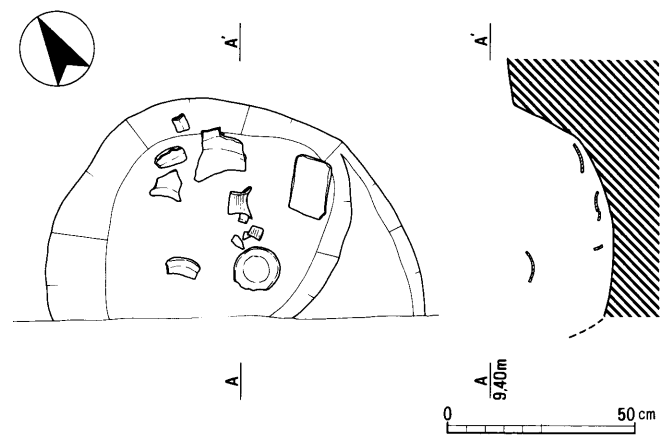
下層ＳＤ３　Ｃ・Ｄ22～23グリッド及び調査区東壁で遺構断面を検出した。西流する。ＳＤ４に切られ、幅は不明である。埋土は、白色砂と有機層の互層となっている。埋没後、シルトが流路上面に堆積している。底部から畿内第Ⅳ様式並行期の壷が出土していることから弥生時代中期の流路であると考えている。



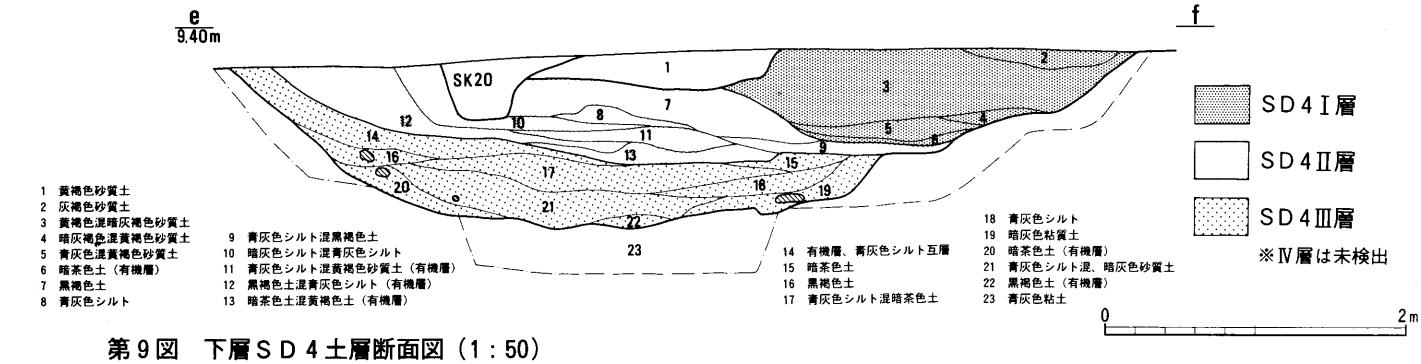
第６図　上層ＳＤ８土層断面図（１：50）



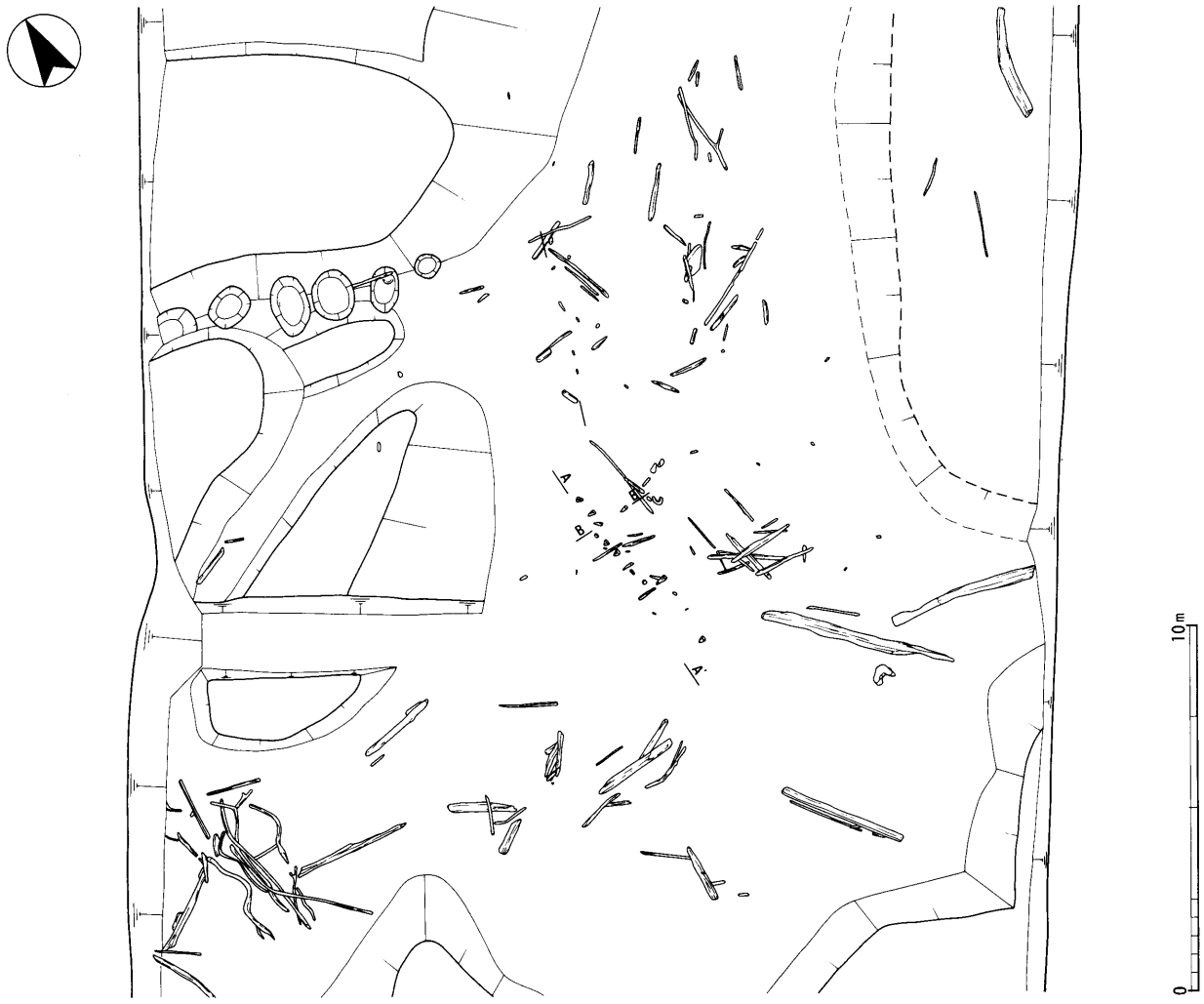
第７図　上層ＳＫ18遺物出土状況図（１：20）



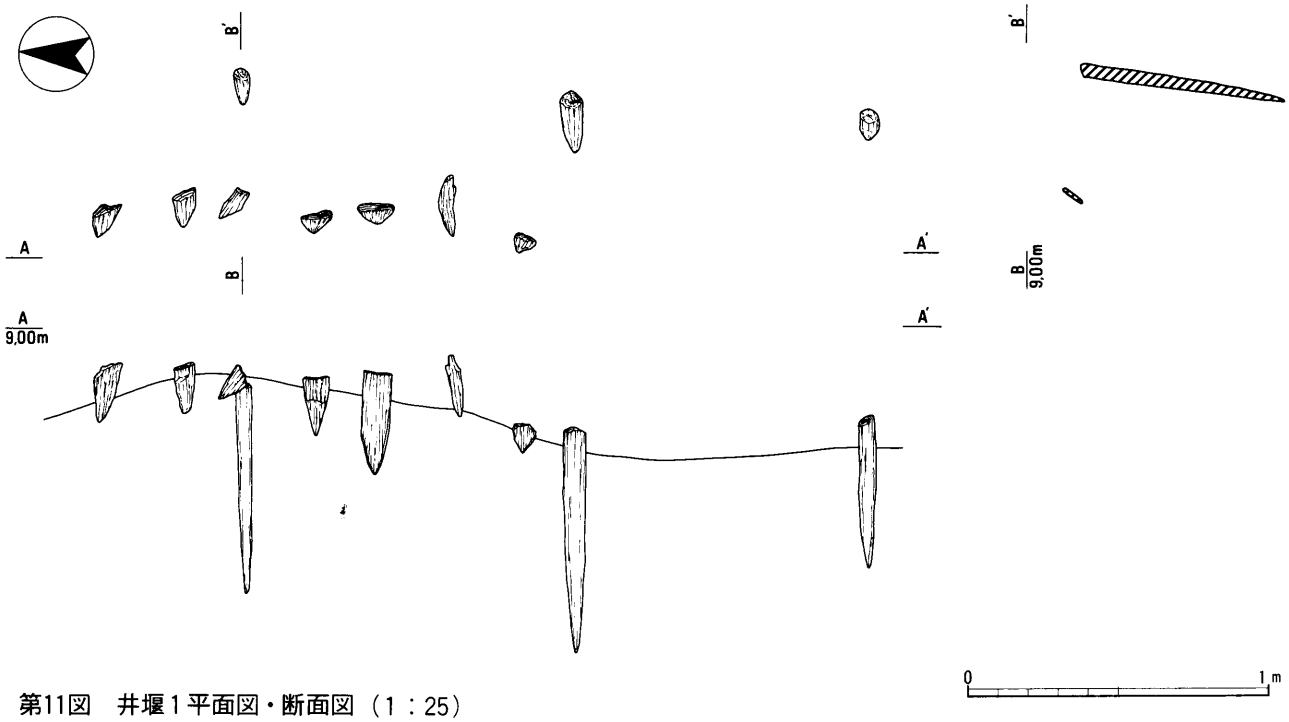
第８図　上層ＳＫ２　遺物出土状況図（１：20）



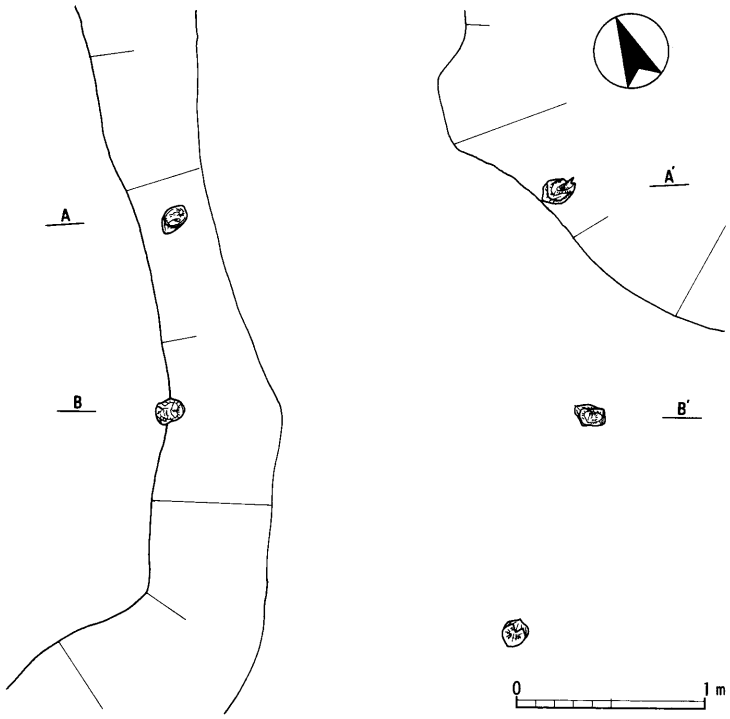
第９図　下層ＳＤ４土層断面図（１：50）



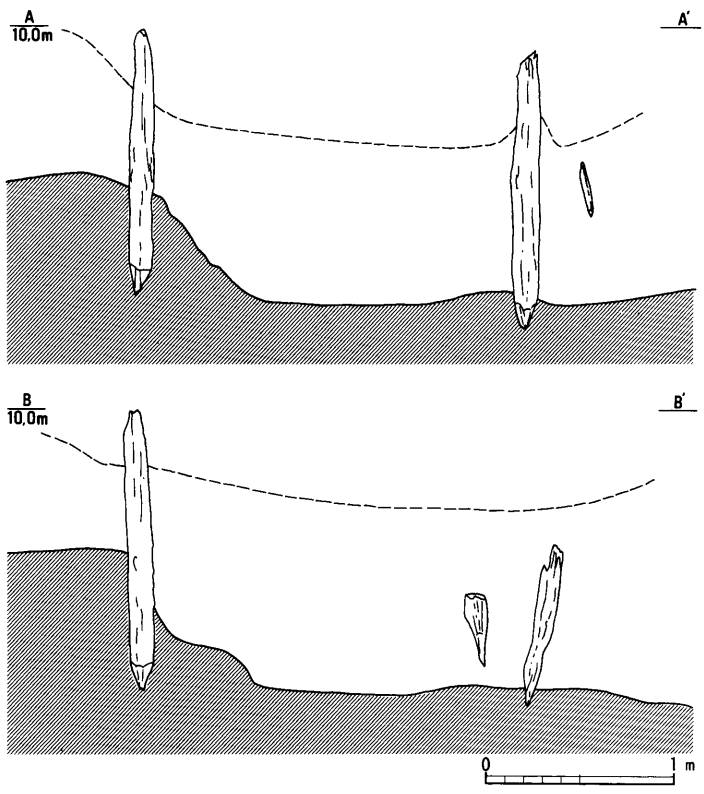
第10図　下層ＳＤ２・ＳＤ４、井堰１・２平面図（１：100）



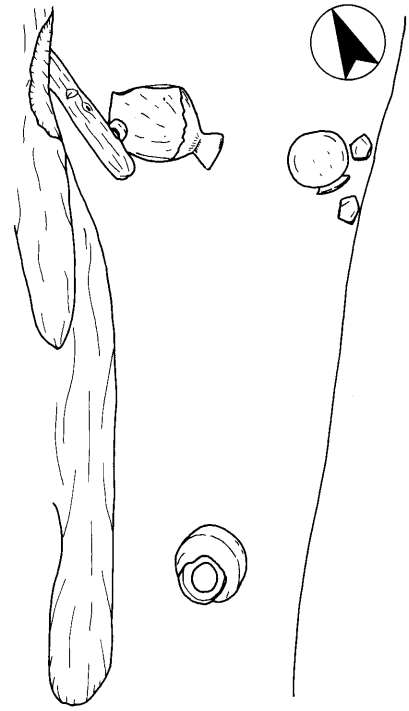
第11図　井堰１平面図・断面図（１：25）



第13図　下層ＳＤ４内土師器出土状況図（１：20）



第12図　杭列平面図・断面図（１：40）



第14図　下層ＳＤ４内木製品出土状況図（１：20）

2．古墳時代の遺構

流路

下層ＳＤ１　A23グリッド及び調査区南壁断面で遺構端部を確認した。なお、24～26列グリッドで、下層確認のためのトレンチ調査を実施したため、遺構全体は検出できていない。端部で幅1.1ｍ、深さ0.6ｍの自然流路である。埋土は暗青灰色シルトと有機物の混入が顕著な砂利の２層に分層され、下層の砂利からＳ字状口縁台付甕が出土している。古墳時代前期の遺構である。

下層ＳＤ２　A23グリッドで検出した。ＳＤ１を切る。自然木の流れ込みが顕著であった。有機物を多量に含んだ埋土から、Ｓ字状口縁台付甕が出土している。ＳＤ１と同時期の遺構である。

下層ＳＤ４　Ａ８～D22グリッドで検出した。調査区を斜めに北流する流路である。検出流路約58ｍ、最大幅約6.4ｍ、最深約0.6ｍであるが、南半部の東岸は調査区外に及んでいる。埋土は大別してⅠ～Ⅳ層に分層される。Ⅰ層は灰褐色砂質土（細砂）、Ⅱ層は細砂と青灰色シルトの互層、Ⅲ層は粗砂が混入する青灰色砂質土と有機層の互層、Ⅳ層は粗砂・砂利が主体となる。なお、Ⅳ層埋没後にD16～21グリッドにわたって青灰色シルトが厚く堆積しており、Ⅲ層以降の流路東肩もしくは中洲状のものと考えられる。Ⅰ層からは上層の遺物の混入も見られたが、古墳時代後期を主体とする堆積面である。Ⅱ～Ⅲ層では、古墳時代前期のＳ字状口縁台付甕と多量の自然木と木製品が出土している。２地点で、土器溜まりも検出した。Ⅳ層からは、布留式期の甕と自然木と木製品が出土している。これらの出土遺物から、古墳時代前期～後期にかけての遺構であると考えられる。

井堰１　下層ＳＤ２・４の合流地点、C21グリッドで検出した井堰と考えられる遺構である。幅15㎝前後の細い矢板状の杭が10～18㎝間隔で、これに平行して丸杭は１ｍ間隔で打ち込まれていた。これ以外の部材は流出したとみられる。下層ＳＤ４と同時期の遺構である。

井堰２　C19グリッドで検出した。井堰１と同形状の井堰である。流路底部の明青灰色シルトに打ち込まれていた。下層ＳＤ４と同時期の遺構であろう。

杭列１　C14グリッドで検出した。最長1.5ｍ、最大径25㎝の杭が下層ＳＤ４内に１組と西岸に１組の計４本確認できた。上層の遺構埋土でも確認できていたが、時期は確定できない。杭の配列や流路の状況から下層遺構の時期を想定している。

Ⅳ．遺　物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナバットで約170箱を数えた。土器については140箱である。ここでは、上層、及び下層遺構出土の遺物に区分して概述する。

１．上層遺構出土の遺物

飛鳥～奈良時代の土師器、須恵器及び土馬等が出土している。ここではＳＤ８の遺物を中心に概述する。

Ａ．土器・土製品

土馬　（１）は上半身が欠損し、脚も右後脚１つを残すだけで、馬具の表現もない[2]。腹部に径２㎝の孔が開けられている。

土師器杯　（２）の外面に焼成後、「伊」の線刻文字が入る。（３）は内面は口縁部から、斜放射状２段の暗文が施されている。（４）は内面に斜放射状１段の暗文と螺旋状の暗文が施されている。平城宮編年のⅠ期[3]に相当する。（３）、（４）共に外面はヘラケズリ後のヘラミガキが施されている。

土師器皿　（５）は、平らな底部から屈曲して立ち上がる。内面に斜放射状１段の暗文と二重の螺旋状の暗文が入る。平城宮編年のⅡ期に相当する。

土師器把手付甕　（６）の口縁端部は面取りし、胴部中央下半部からは斜めのハケ調整が施される。

土師器高杯（脚部）　（７）は接合部から杯身に差し込む技法を使っている。外面は、面取りナデが施されている。内面は、全面に指オサエが施されている。飛鳥編年のⅣ期と考えられる。

須恵器杯蓋　（８）は天井部外面に「〉」のヘラ記号がある。（９）の天井部はやや偏平で、中央に宝珠ツマミが付く。口縁端部はやや内傾する。カエリ

はない。平城宮編年のⅢ期に相当する。

須恵器杯身　(10) の口縁部は直立気味に立ち上がる。底部外面は、回転ヘラキリ調整を施す。Ⅲ期に相当する。(11・12) の口縁は緩やかに立上がり、端部はやや外反気味である。高台は四角く、しっかりしている。飛鳥藤原編年のⅣ期に相当する。

須恵器鉢　(13) は口径18cmの鉢である。口縁部はやや外反する。

2．下層遺構出土の遺物

弥生時代中期～古墳時代前期の土器や古墳時代前期の埴輪及び多量の木製品が出土している。以下、下層ＳＤ４出土の遺物に絞って概述する。

Ｂ．土器

土師器壷　(14) は口径12cmの複合口縁の壷である。口頸部中央に小さな孔が２か所に開けられている。体部の上半と下半に粘土接合痕が見られる。

土師器甕　(15) は体部最大径部分に穿孔がある。庄内式期のものである。(16) は口縁端部に沈線が入る。頸部は肥厚し、体部最大径部にかけて薄くなる。布留式期に比定される。(17) は (16) よりも新しい。(18) も同時期であろう。口縁部が外反し、端部は丸みを帯びる。外面調整も、体上部にのみ横位ハケメ１帯が入る。(19) の受口甕は口縁部外面にハケメ刺突文を施し、口縁部外面の屈曲部は鋭い稜をもつ。(20・21) はＳ字状口縁台付甕である。(20) の体上部の外面調整は斜行ハケメと横位ハケメ１帯を施す。(21) は口径30.2cmの大型の甕である。口縁部外面の屈曲はやや丸みを帯びる。元屋敷式期に相当する。(22) の体部外面の斜行ハケメは粗い。体部内面には斜行ヘラケズリが施される。脚台端部は面を持つ。折返しはない。(23) の口縁部はやや立上がり気味となる。体部内面に板ナデ調整が施される。粘土接合痕が残る。

Ｃ．埴輪

朝顔形埴輪　(24) の頸部から突帯にかけて指オサエ後、２条の横ナデが入る。壷胴部には、４方向から３角形の透孔が穿たれている。布留式期まで遡れよう。(25) は (24) と同一個体であろう。(26) は円筒埴輪の突帯部か。突帯上端部は (25) よりもやや尖る。(27) は、基底部である。体部外面にはヨコハケ後に斜行ナデが施されている。

Ｄ．木製品

樹種同定のための自然木サンプルも合わせて、出土した木製品はコンテナバットで約30箱を数える。ほとんどが下層ＳＤ４から出土している。以下、用途別に判別できたものから順に概観する。

把手　(28) はＣ21グリッドから出土した。長さは13.8cm、幅は８cm、断面長方形の厚さは 2.8cmである。木取りは、縦の板目取りである。形状から農具か、もしくは容器の把手部分であろう。杭に混じって出土した。下層ＳＤ４のⅣ層から出土した。この他に、別地点からも同様なものが、出土している。

武具

弓　(29) はＤ19グリッドから出土した。長さ36cm、最大径2.4cm、弓はず端部径２cmである。全面に細かい削り痕跡が見られ、その単位は長さ６cm、幅0.4cmである。木取りは芯取りである。平坦面は、かなり粗い加工が施されている。下層ＳＤ４のⅡ層から出土した。

容器

曲物底板　(30) は現存する長さ50cm、幅8.6cm、厚さ 1.4cmの細長で端部は丸みを帯びた曲物の一部と見られる部材である。木器集成図録でいう、底板周縁上面を切り抜き段を作り、そこに側板をあてたとするＤタイプ[4]と考えられる。これに接合する側板は確認していないが、周縁部の形状から、側板の厚みは1.6cm程度とみられる。

大型槽　(31) はＣ11グリッドから出土した。長さ102.4cm、幅は37.6cm、深さ16cmの大型槽である。木取りは、一木作りで板目取りである。体部側面の厚みは上部ほど厚みを増す。底部は、やや弯曲している。下層ＳＤ４のⅠ層から出土した。

小型槽　(32) はＤ22グリッドから出土した。長さ42.2cm、幅14.4cm、深さ８cmの槽である。長方形でで平底である。体部側面の厚みはほぼ一定で、大型槽 (31) と比較すると、若干下部が厚い。下層ＳＤ４のⅡ層から出土した。

把手付槽　(33) はＣ15グリッドで出土した。現存する長さ90cm、幅14.4cm、厚さ3.2 cmの槽の一部である。もとは恐らく１ｍを越えるもので、両側面に把手が２つ装着する槽であろう。下層ＳＤ４のⅣ層

から出土した。

（34）はC25グリッドから出土した。把手、把手装着部の側面、本体底部の3個体に分かれる。同一個体であれば、（33）よりも大型になろう。

漁撈具

櫂　（35）はD19グリッドで出土した。長さ107.2cmの完存品である。柄は長さ69.2cm、径2.8cm、水掻き部は長さ38cm、幅10.4cm（中心部は幅6.5cm）である。水掻き部は、断面で観察すると緩いカーブを描き、端部は 2.4cmの凸状を呈している。使用形態からは、両手で櫂を握るいわゆるパドルと考えられる[5]。柄部の中央には、櫂座と摩擦した痕跡は認められない。ただし、水掻き部の形状からすると、水掻きの抵抗が下がるので、他への転用か、もしくは農具の可能性も考えられる。現時点では一応櫂としておく。下層ＳＤ４のⅢ層出土であり、周囲で古墳時代中期の甕が出土していることからも同時期の所産であろう。

農具

鋤柄　（36）はC12グリッドから出土した。長さ73.2cm、幅（把手部分）10cm、径（握部）2.8cmが残存しており、鋤先は折損している。握部の腐食は激しい。木取りは柾目取りである。下層ＳＤ４のⅢ層から出土している。

部材

杭　（37）はC13グリッドから出土した、杭列１の構造材である。長さ137.2 cm、径10.6cmである。先端は長さ16cmが削られ、面取りされている。上部は折損して形状は不明である。時期的には、下層ＳＤ４埋没直後のものであろう。

（38）はC14グリッドから出土した。長さ151.2cm、径13.2cmが残存している。先端は長さ29cmにわたって削られ、面取りされている。（37）同様、杭列１の１つである。同時期の所産である。

（39）は矢板と共に下層ＳＤ２とＳＤ４の合流地点、C21グリッドで出土した。現存する長さ68.1cm、径6.6cmである。上部は欠損していて、原型を留めない。井堰１の構造材で、暗青灰シルトの流路底面に打ち込まれていた。下層ＳＤ４のⅢ層から出土した。

矢板　（40）は現存する長さ33.6cm、幅10.2cm、厚さ2.6cmである。上部は折損している。木取りは板目取りで、材質は広葉樹で、先端部は24cmにわたって削られ、尖っている。（39）と同様、井堰１の構造材である。同様にⅢ層から出土した。

建築部材

扉材　（41）はD18グリッドから出土した。現存する長さ60cm、幅16cm、厚さ4.4cmで、一方の軸部が４cm残存している。劣化が激しく、もう一方の軸部は折損している。下層ＳＤ４の流路中央Ⅱ層から出土している。検出時には、この部材と垂木が密着し、垂木が固定されていたので、矢板への転用材と想定した。

妻壁板材　（42）はC22グリッドから出土した。現存する長さ66.2cm、幅10.6cm、厚さ2.6cmで、妻壁に用いた横板らしい。木口は32°に削り落としてある。もう一方は、かなり劣化が激しく、折損している。流路底部に突き刺さった状況から、矢板への転用材とみられる。

柱材　（43）はD15グリッドから出土した。現存する長さ 214cm、径 9.6cmで、先端部から50cmほどは腐食の激しい部材である。下層ＳＤ４のⅡ層から出土した。

（44）はC16グリッドから出土した。長軸 267cm、径10.4cmの部材で、残存状態は良好である。先端部に長ほぞ11.6cmが付いている。さらに上端から６cmと75cm下には、抉りが施してある。（43）と同様、下層ＳＤ４のⅡ層から出土している。

用途不明品

板材　（45）はB12グリッドから出土した。現存する長さ49cm、幅18cm、厚さ6.4cmの腰掛け状の板材である。木取りは柾目取りである。下層ＳＤ４のⅢ層から出土した。

（46）はC11グリッドから出土した、腐食の激しい板材である。現存する長さ79.2cm、幅38.2cm、厚さ4.8cmの材である。端部から８cm中程に長さ17.8cm、幅9.6cmの長方形の孔が開けられている。下層ＳＤ４のⅡ層から出土した。

（47）はD22グリッドから出土した、完形の板材である。長さ178cm、幅21.2cm、厚さ5.8cmである。木取りは柾目取りである。両側面には全面にわたり、一列７cm幅単位の工具による連続した加工痕跡がみ

られる。下層ＳＤ４とＳＤ３とが合流する地点で検出されたため、層位は確認できなかった。

枠材　(48) はＣ12グリッドから出土した。短辺端部の腐食が激しい。現存する長さ58cm、幅31.2cm、厚さ 4.4cmである。一方は径30cmで円弧状に加工されている。さらに端部は凸状に作りだされている。何らかの部材と組み合わせて使用したと考えられるが、現段階では用途不明の枠材とした。下層ＳＤ４のⅢ層から出土した。

棒状木製品　(49) はＣ16グリッドから出土した。長さ62.2cm、径 8.4cmで断面は円形である。半面は焼かれている。抉りを全周に入れ、頭部を作り出している。頭部と反対側の加工痕から杭への転用材と考えられる。一般的に祭祀具の可能性もあるが、用途は不明である。

(50) はＢ11グリッド（調査区西壁）で出土した。現存する長さ 112.8cm、径 3.8cmで、先端部は折損している。(49) と同様、頭部を作りだしている。用途不明である。下層ＳＤ４のⅣ層から出土した木製品である。

〔註〕

① 河北秀実「鳥居本遺跡」〔（『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告－第３分冊10－』）三重県埋蔵文化財センター、1991年〕。

② 小笠原好彦「土馬考」（『物質文化25』、1975年）。

③ 古代の土器研究会編「都城の土器集成」（『古代の土器１』、1992年）。なお、以下では所収の土器編年を用いた。

④ 「容器」（『木器集成図録・近畿原始篇（解説）』奈良国立文化財研究所、1993年）。

⑤ 「漁撈具」（『木器集成図録・近畿原始篇（解説）』奈良国立文化財研究所、1993年）。

⑥ 「松阪市の古墳、神戸地区」（『松阪市史第２⑥－資料篇－考古』、1978年）。
竹内英昭「Ｖ伊勢地方の埴輪事情」（『天花寺山』一志町・嬉野町遺跡調査会、1991年）。

Ⅴ. 結　語

遺構について

周知の堀田遺跡は、既調査においては集落跡と性格付けられている。今回の第３次調査では、調査区内で比較的安定している12～16列グリッドで西方に続くPit を確認したのみで、建物群を確認するには至らなかった。しかし、古墳時代から奈良時代にかけての流路については、土壌や出土遺物をもとに時期的な変化を概略辿ることができた。

下層遺構（流路）の調査結果をまとめてみた。

①古墳時代の流路である下層ＳＤ４の埋土をⅠ～Ⅳ層に分層したが、出土遺物からⅡ・Ⅲ層は、あまり期間を置かずに堆積していること。

②ＳＤ４（流路）の流れる方向は各層の時期によって変化していること、である。

埴輪について

南勢地方でも古い形の埴輪は松阪市の高田２号墳や坊山１号墳出土の円筒埴輪がある。高田２号墳からは朝顔形埴輪も出土している。また当遺跡の周辺でも西野８号墳からは同時期の埴輪が出土している⑥が、口縁部の形状、突帯の突出度からみても堀田遺跡の埴輪は、時期的にみてもこれらの時期を下らないであろう。特に透孔が壷胴部の中央部分に穿たれていることや、基底部の調整に時期的な特徴が見られることからも布留式期の範疇に比定される。今後の堀田遺跡の調査でも、流路からの出土が期待される。

木製品について

堀田遺跡出土の木製品は総数247 点に及び、全て流路からの出土である。

確認された製品の用途については、杭が88点で圧倒的に多い。次いで建築部材、弓、そして棒状品等の用途不明品、容器である。地理的環境から言えば、漁撈具や農具の割合が多いと予想していたが、僅かに確認されただけであった。

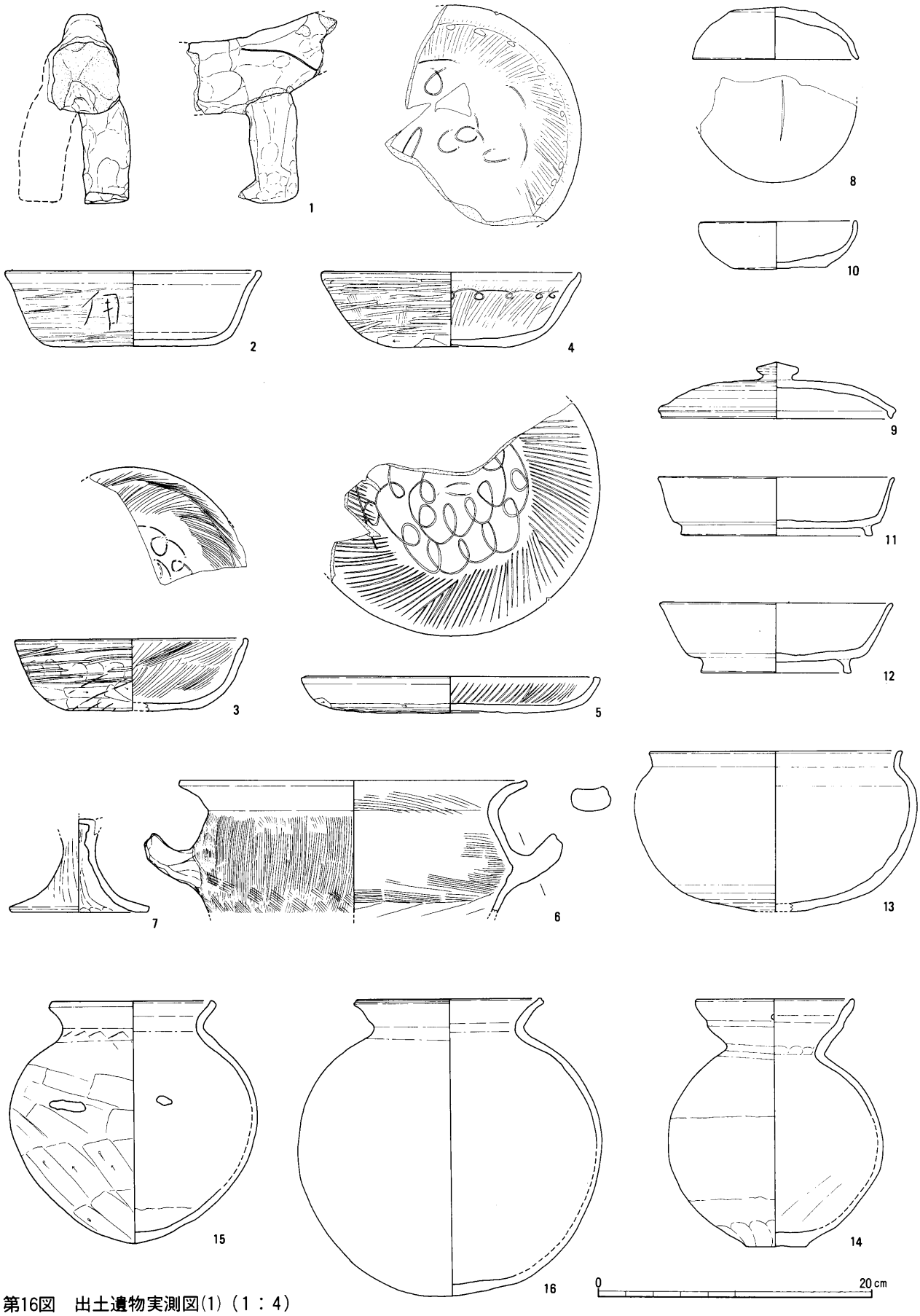
個々について検討すると、自然木に混じって出土した杭には、転用材も多かった。これらは垂木等の建築部材を転用したものである。

また井堰の構造材は２種あって、１つには広葉樹の割材を使った矢板、その東方に針葉樹を加工した杭がある。矢板は、水面上部分については欠損が激しく残存部も僅かであった。

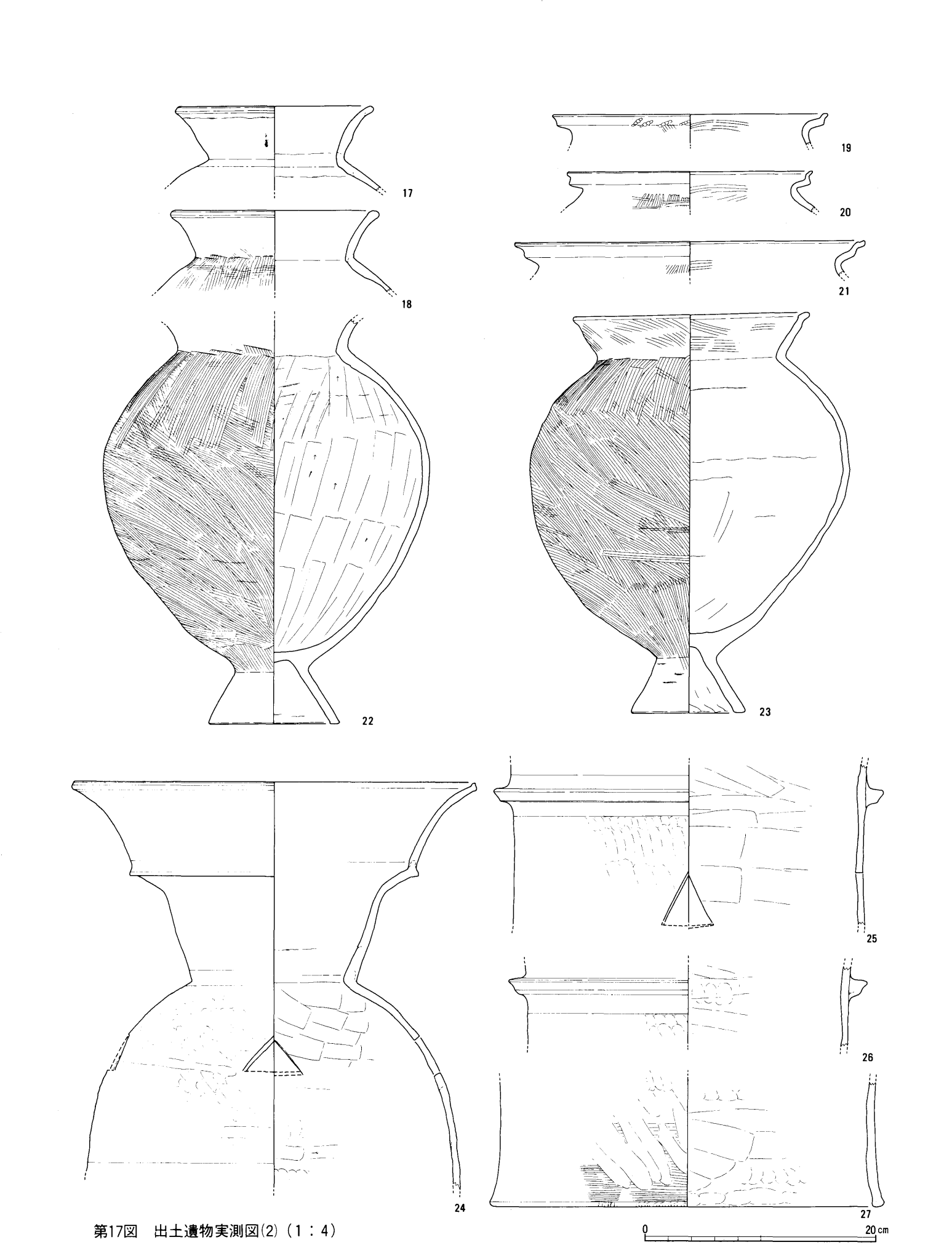
B16 グリッド検出（ＳＤ４左岸の肩部分）の杭列については、時期的なこと、構造的なことを併せて詳細は今後の報告に譲りたい。　（中川　明）

No	登録No	器種	出土位置 遺構	法量 口径	法量 器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	009-01	土師器土馬	C22 D23 SD8	5.3 3.3		指オサエ成形	密 含微砂粒	良	灰白色	2／3	
2	021-02	土師器杯	C11 SD8	18.5	5.5	内：口縁ヨコナデ、底部ナデ 外：全ミガキ	密 含微砂粒	良	橙色	3／4	「伊」の焼成文字
3	004-01	土師器杯	B9 SD8	17.0	5.3	内：ナデ後暗文（放射状2段） 外：ケズリ後ミガキ	密～1㎜ 含微砂粒	良	橙色	1／4	外底ヘラ記号？
4	002-02	土師器杯	D1 SD8	19.0	5.5	内：ナデ後暗文（放射状1段） 外：ケズリ後ミガキ	密～1㎜ 含微砂粒	良	橙色	3／8	磨滅し調整不明瞭
5	001-01	土師器杯	B10 SD8	21.7	2.7	内：ナデ後暗文（放射状1段） 外：底ヘラケズリ	密～1㎜ 含微砂粒	良	橙色	1／2	内外面一部黒変する
6	006-01	土師器甕	B11 SD8	25.1		内：ヨコハケ後ナデ、体部ヨコハケ 外：タテハケ、体部斜行ハケ	密	やや粗	浅黄橙	1／4	
7	009-04	土師器高杯	C12 SD8	9.7		内：底部指オサエ 外：面取りナデ	密	良	にぶい橙		
8	013-05	須恵器杯蓋	C11 SD8	12.1	3.8	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ　天井部不明	含細砂粒	良	灰白色	3／8	内面ヘラ記号アリ
9	017-01	須恵器杯蓋	B10 SD8	16.8	4.1	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ　ロクロケズリ	密～2㎜ 含砂粒	良	灰色	1／3	ツマミは貼付ナデ
10	013-06	須恵器杯身	C16 SD8	11.5	3.5	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、底部ヘラギリ未調整	密 含細砂粒	良	灰白色	3／8	
11	013-01	須恵器杯身	B10 SD8	17.2	4.3	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ロクロケズリ後貼付高台	密 含細砂粒	良	灰色	1／4	
12	013-02	須恵器杯身	B11 SD8	17.0	5.1	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ロクロケズリ後貼付高台	密 7含細砂粒	良	灰白色	残僅か	
13	017-02	須恵器鉢	A9 SD8	18.2		内：ロクロナデ 外：底部ロクロケズリ	密～1.5 ㎜含砂粒	良	灰色	残僅か	
14	036-03	土師器甕	SD4	12.0	17.6	内：ナデ 外：ヨコナデ、体部下半ヘラケズリ	含細砂粒	やや粗	灰色	2／3	体部中央に穿孔あり
15	037-01	土師器甕	D16 SD4	13.5	21.6	内：口縁ヨコナデ、底部未調整 外：ナデ	含細砂粒	良	黄灰色	ほぼ完存	口縁部沈線が入る
16	036-02	土師器壷	SD4	11.5	18.0	内：ナデ、底部ヘラケズリ 外：ナデ、頚部指オサエ、底部ナデアゲ	含微砂粒	良	灰黄色	完存	頸部中央に穿孔2か所
17	034-01	土師器甕	SD4	16.5		内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	やや粗	並	灰黄色	4／5	内外面に粘土接合痕
18	034-03	土師器甕	SD4	16.9		内：ヨコナデ 外：タテハケ後横行ハケ	粗～6㎜ 含砂粒	並	にぶい黄橙色	1／5	
19	029-04	土師器甕	SD4	23.8		内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、刺突	含細砂粒	良	灰白色	残僅か	
20	029-05	土師器甕	C20 SD4	21.2		内：ヨコナデ 外：タテハケ後ヨコハケ	含細砂粒	良	灰白色	残僅か	
21	029-01	土師器S字甕	C20 SD4	30.2		内：ヨコナデ 外：タテハケ	含細砂粒	良	灰白色	残僅か	
22	040-01	土師器甕	SD4	底径 11.2		内：ヘラケズリ後一部ナデ 外：斜行ハケ、脚部ナデ	やや密～3. 5㎜石粒	良	にぶい黄橙色	口縁部欠	
23	041-01	土師器甕	SD4	20.2	34.4	内：ヨコナデ後斜行ハケ、板ナデ？ 外：全斜行ハケ、底部ヨコナデ	やや密含～ 1㎜砂粒	良	にぶい黄橙色	ほぼ完存	
24	045-01	朝顔形埴輪	C13 SD4	34.5		内：肩部板ナデ、壷胴部ケズリ 状ナデ 外：ヨコナデ、オサエ後ナデ	密	良	にぶい黄橙色		三角透孔、突帯残存
25	045-02	朝顔形埴輪	B11 SD4			内：板ナデ 外：突帯貼付ナデ、オサエナデ	密	良	にぶい黄橙色		三角透孔突帯残存
26	045-03	円筒埴輪？	C13 SD4			内：オサエ後板ナデ 外：突帯貼付ナデ、オサエナデ	密	良	にぶい黄橙色		朱彩
27	045-04	埴輪基底部	C13 SD4			内：オサエ後板ナデ 外：オサエ、ヨコハケ後斜行ナデ	密	良	赤橙		端部に圧痕

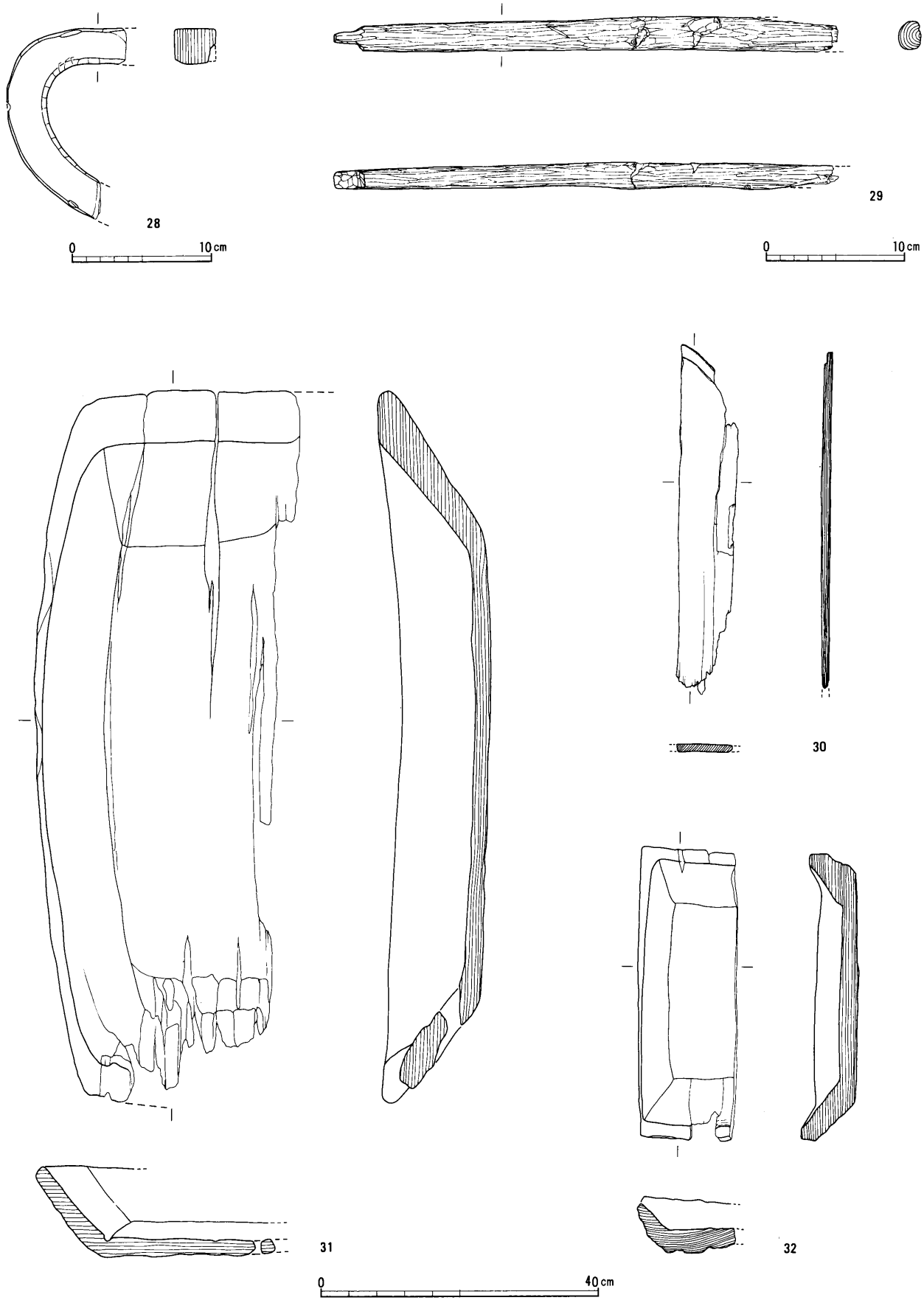
第1表　遺物観察表



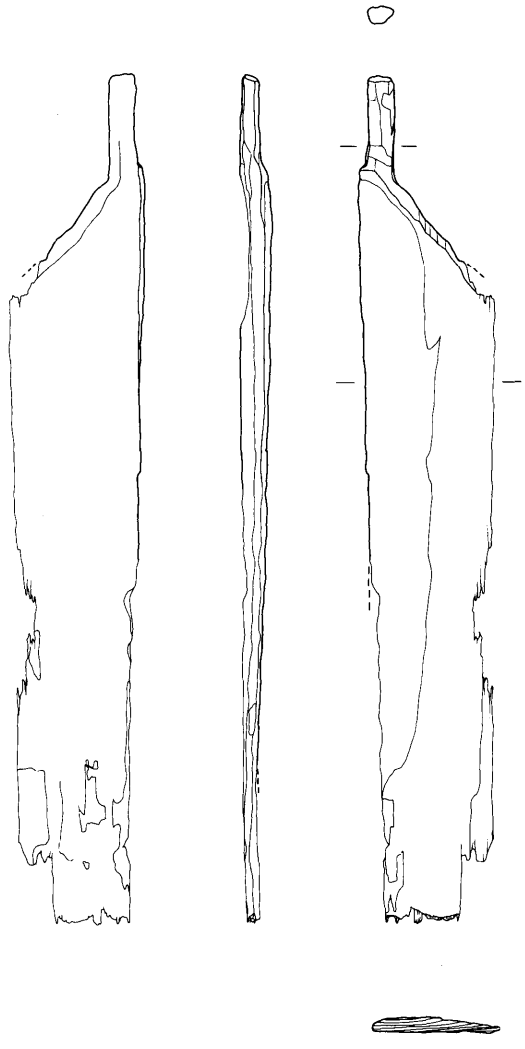
第16図　出土遺物実測図(1)（1：4）

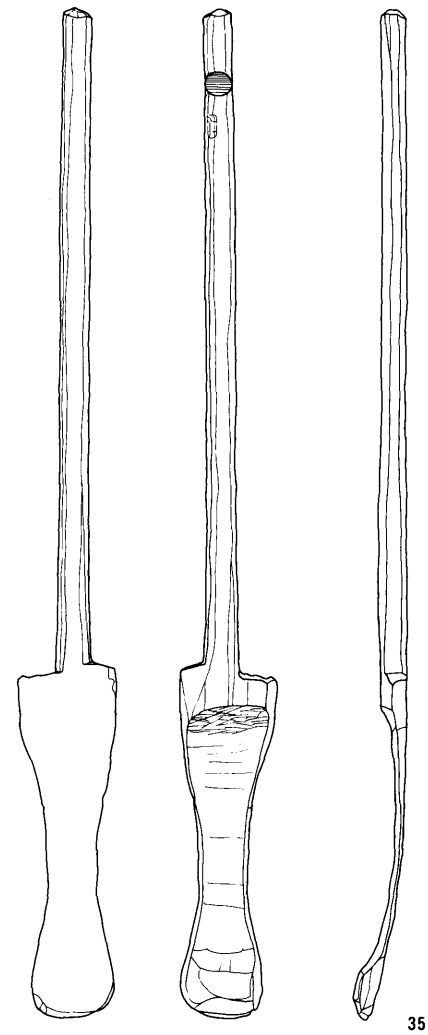


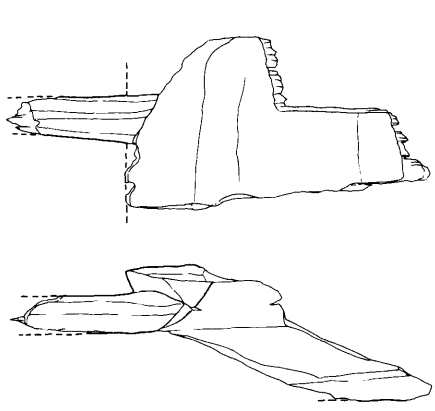
第17図　出土遺物実測図(2)（1：4）

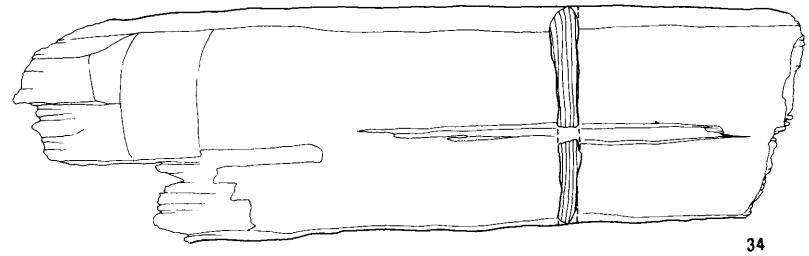


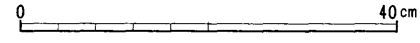
第18図　出土遺物実測図(3)（28・29は¼、他は⅛）



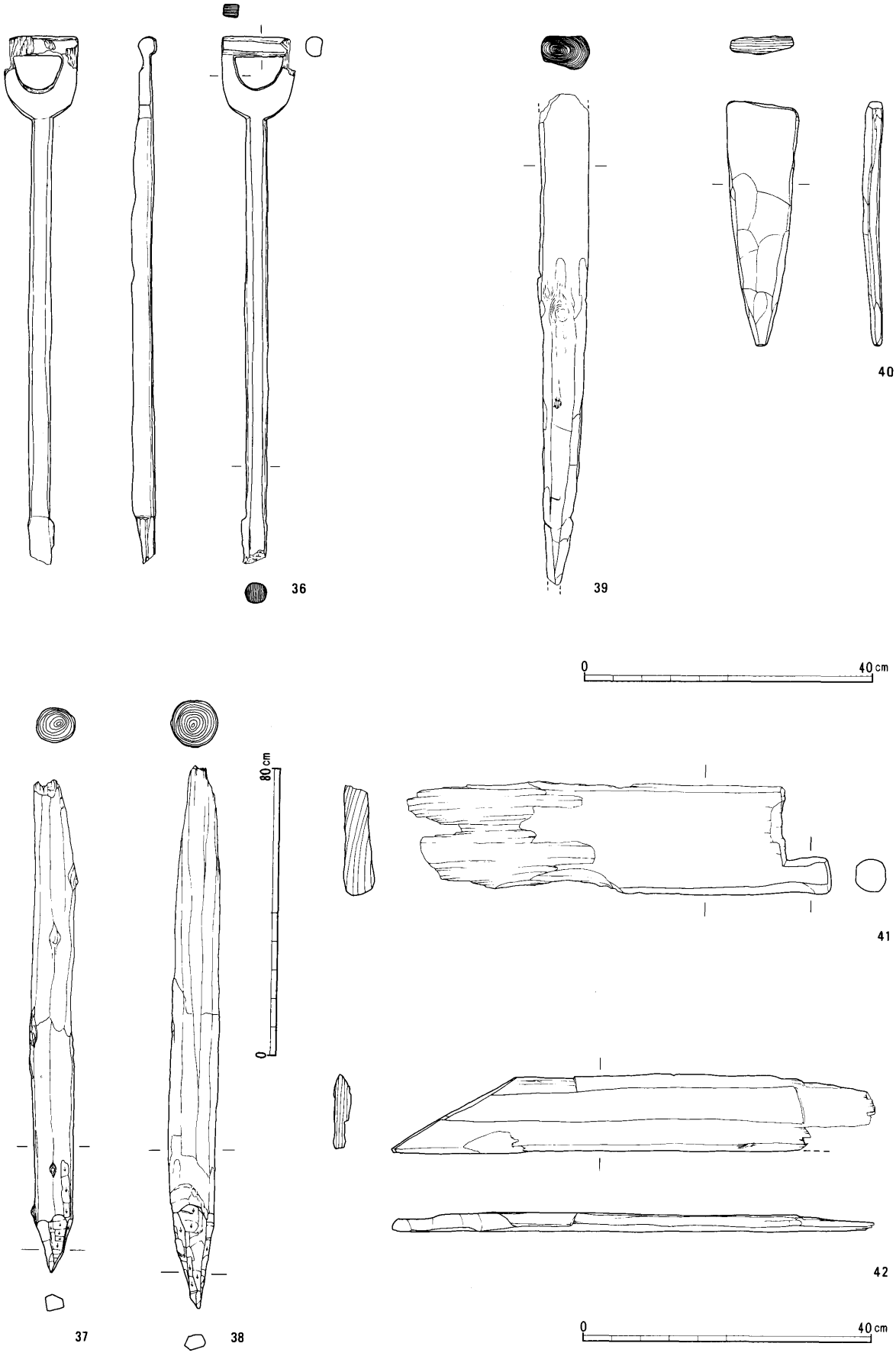




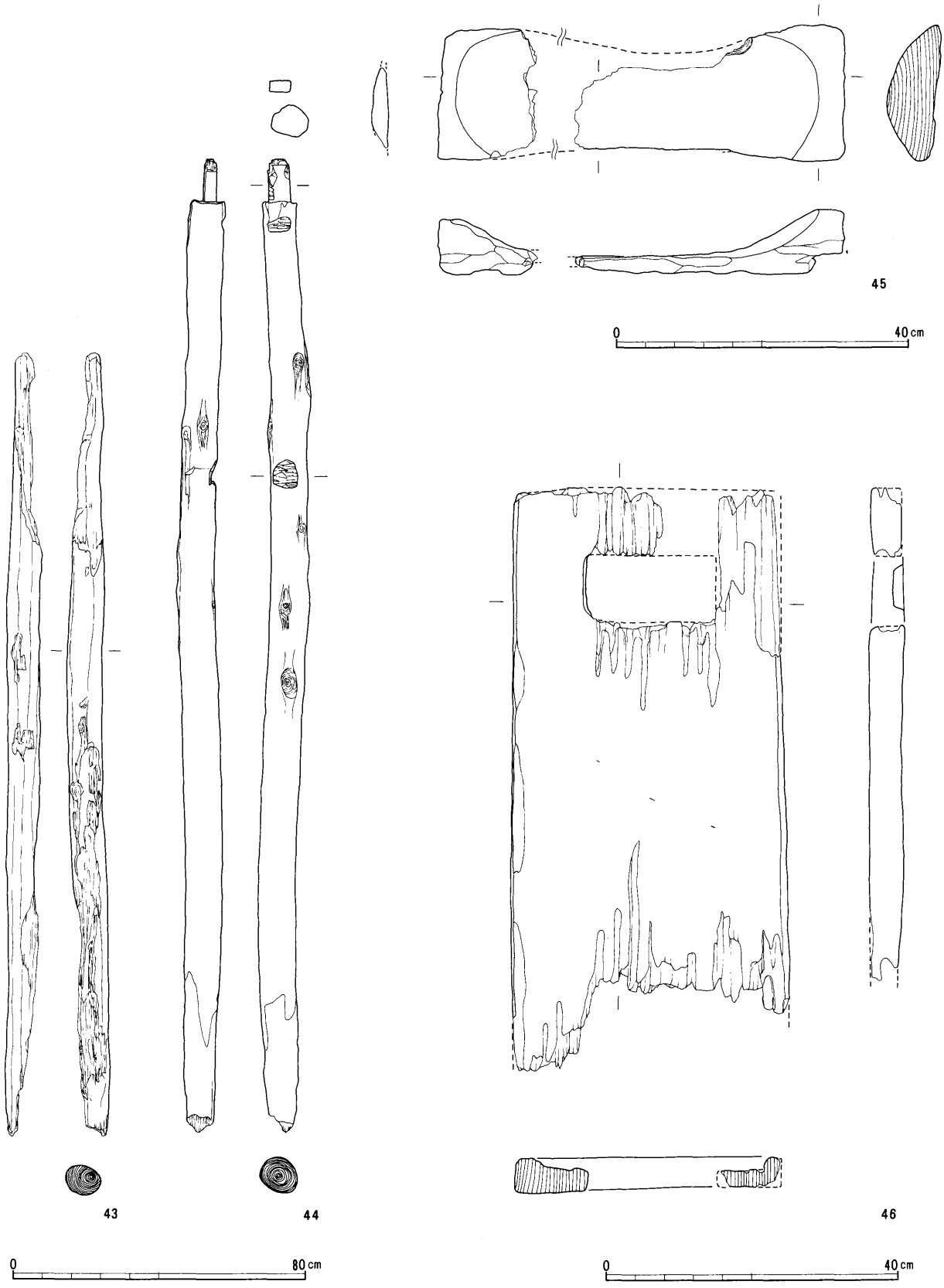




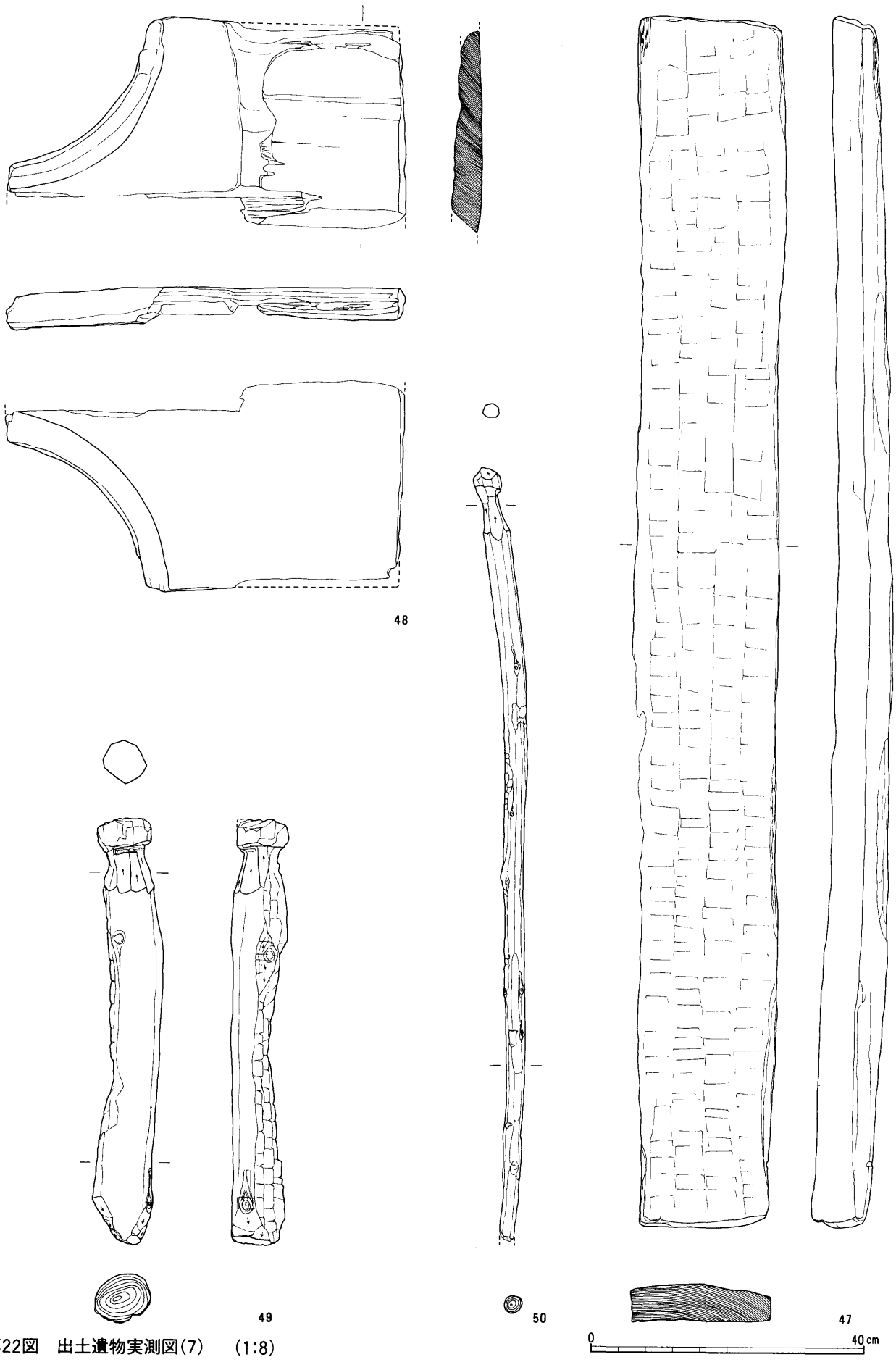
第19図　出土遺物実測図(4)（1：8）



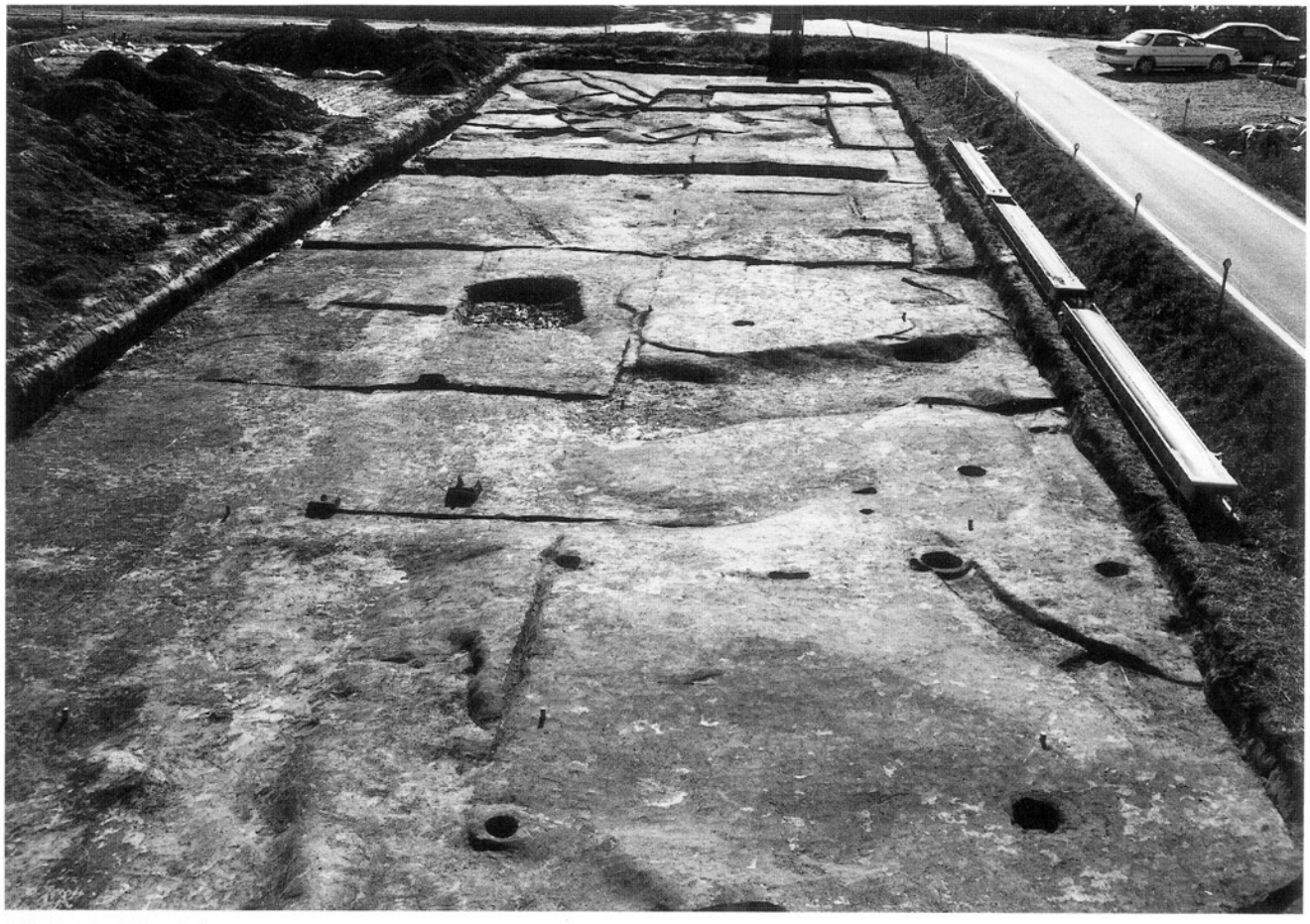
第20図　出土遺物実測図(5)（37・38のみ 1/16、他は 1/8）



第21図　出土遺物実測図(6)（43・44のみ1/16、他は1/8）

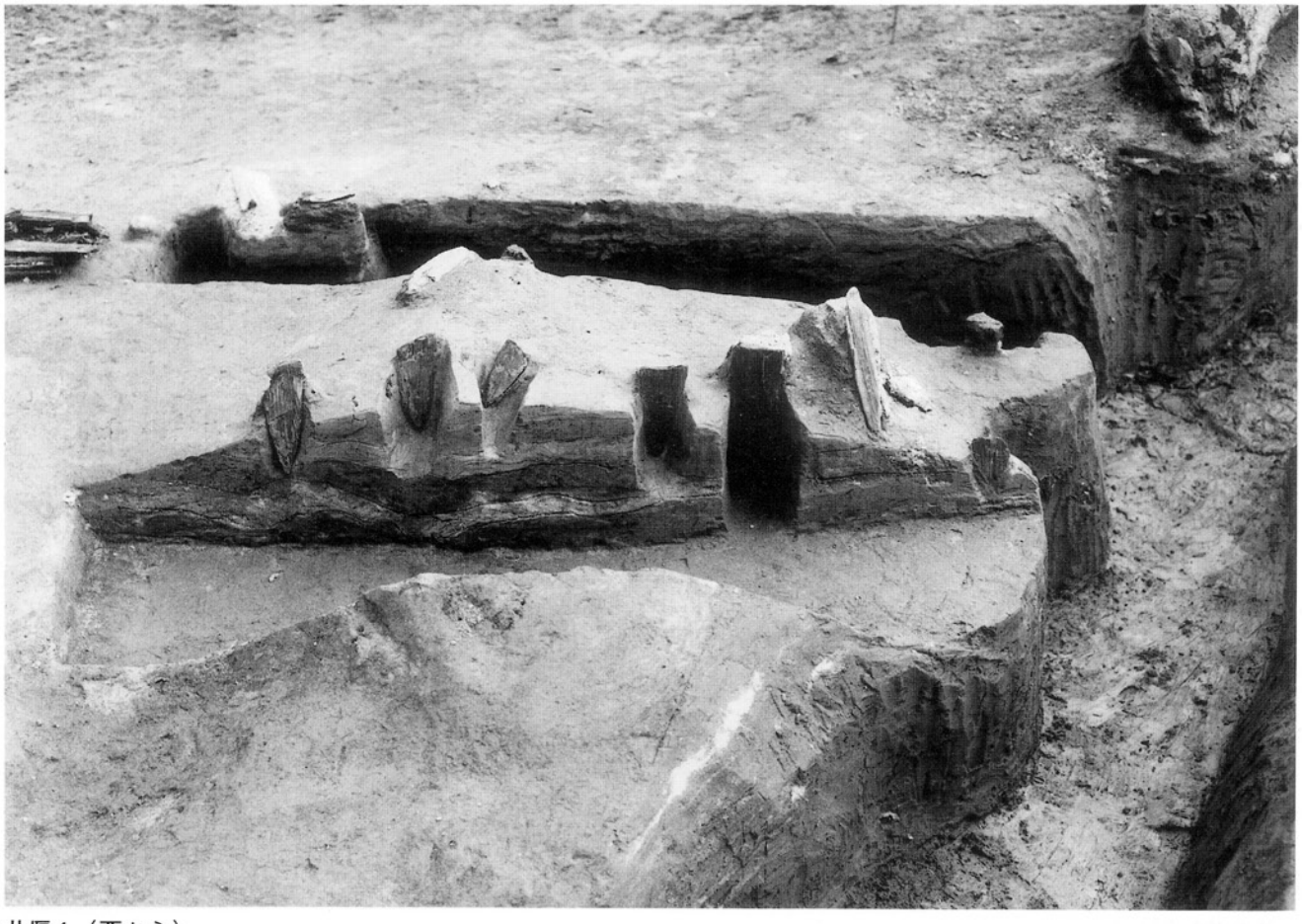


第22図　出土遺物実測図(7)　(1:8)



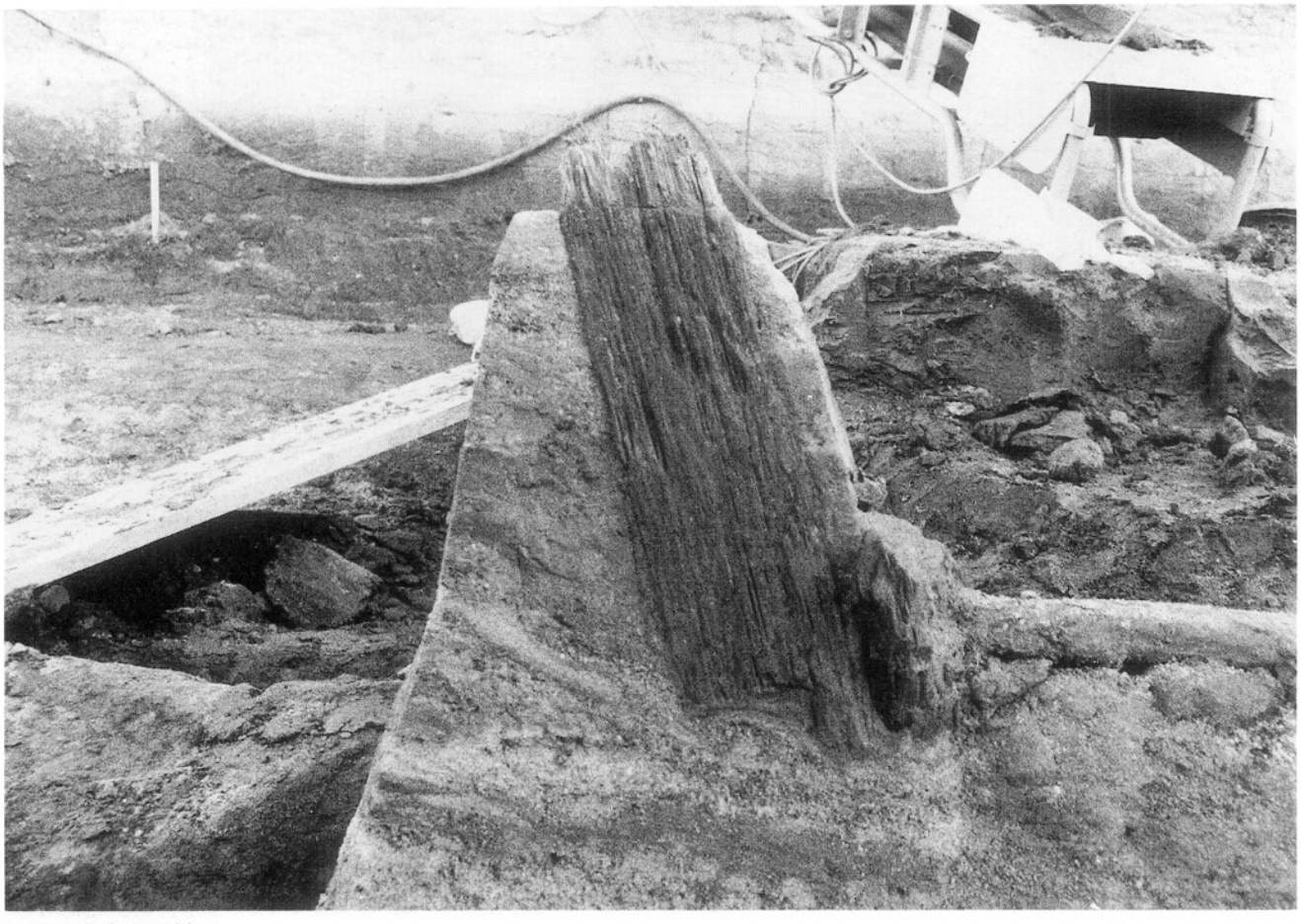
上層南半（北から）

上層南半（南から）



井堰 1（西から）

SD 4 出土のS字甕



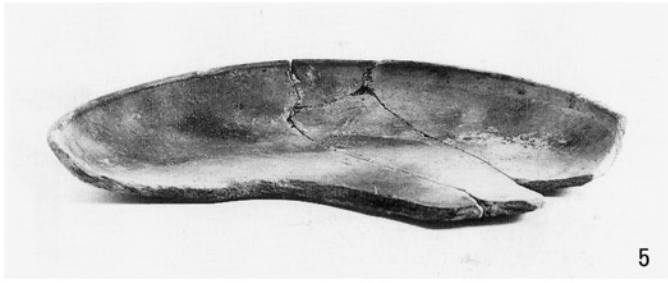
SD 4 出土の扉材

ＳＤ４出土の槽

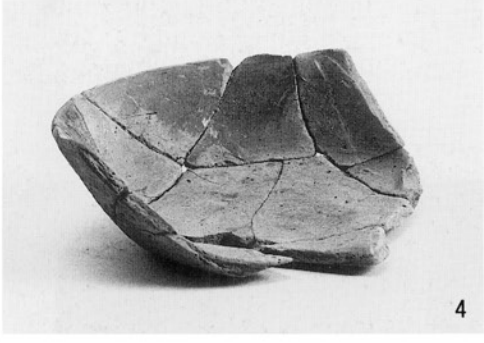
ＳＤ４出土の枠材

1

7

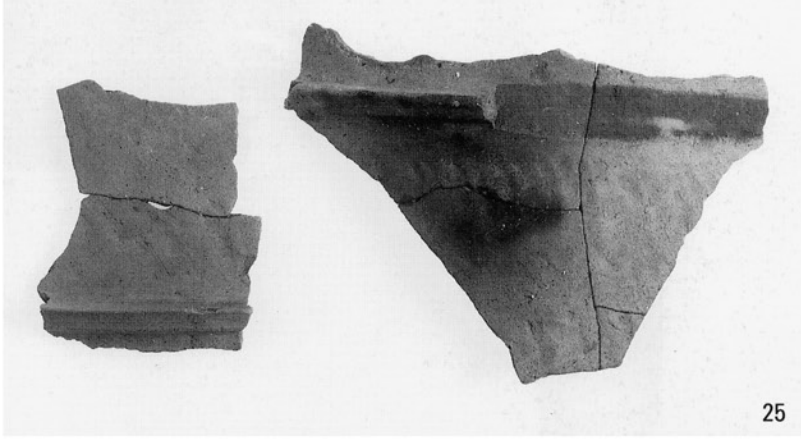

5

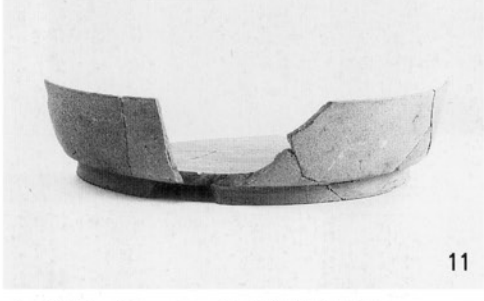
3

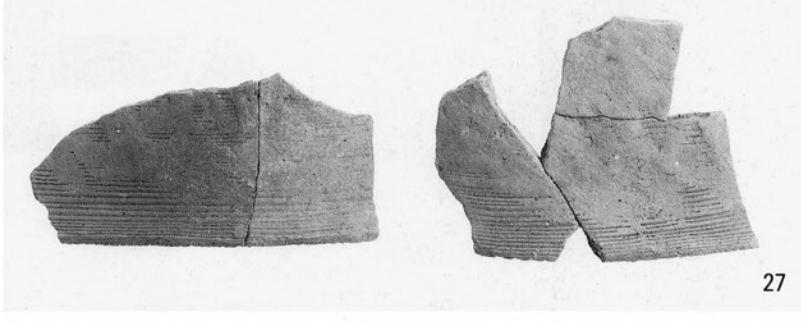

4

24

9


25


11


27

出土遺物（24・25・27は¼他は⅓）

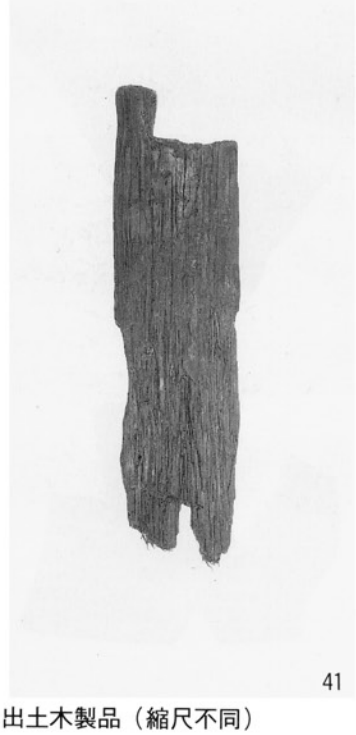
28

36

35

29

31


41

44

出土木製品（縮尺不同）

報告書抄録

ふりがな	ほった いせき だいさんじ はっくつちょうさ がいほう
書名	堀田遺跡第3次発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	139
編著者名	中川 明・西村美幸
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－03 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL05965(2)1732
発行年月日	西暦 1996年 3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
ほったいせき 堀田遺跡	みえけんいちしぐん 三重県一志郡 うれしのちょうみやこ 嬉野町宮古 あざほった 字堀田	24405	224	34度 38分 05秒	136度 38分 07秒	19951002～ 19960209	1,500	県道松阪一志線の特殊改良工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堀田遺跡	集落跡	弥生	流路 1条	弥生土器 壺 埴輪	朝顔形埴輪の凸帯、三角透かし、基底部の調整は特異。
		古墳	流路 3条 井堰 2基	土師器甕、壺 ミニチュア土器 木製櫂、弓、槽、杭	櫂は完存
		飛鳥・奈良	流路 5条 土坑 2基	土馬、土師器杯、 須恵器杯身、杯蓋 開元通寶、元祐通寶	

平成8(1996)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年6月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財発掘調査報告１３９

堀田遺跡第3次発掘調査

―― 一志郡嬉野町 ――

１９９６年3月

編　集
発　行　三重県埋蔵文化財センター

印　刷　東海印刷株式会社